

野山に花の咲く如く

数えて十二の春、ようやく私の半生について語ることを許された。

文字通りの意味で、半生。もうその時点で一生の折り返し地点だった。

お前は三十はおろか、二十五までも生きまいと母かあさま様に言われた。

他人事のように母様は言い、また私もそう感じていた。別段悲しくはなかった。何人も永遠には生きないと教えられていた。それは悲しくもない普通のことなのだと言われた。それを私は信じていた。信じる他、無かった。ごく当たり前のことのように私は自分があと余命幾ばくもないことを受け入れていた。

御阿礼の子は、書くために生まれた。だから、書き終われば死んでいく。書き終わるまでの短い日々さえあればそれでよい。ただそれだけのことだ。

その春、私は一つの帳面を渡された。綺麗な赤い木綿糸で綴じられた、真つ新たな和紙の帳面。其所に己の書くべきことを綴るように言われた。語るべきことも無いまま生きてきた私はまず手始めに身の回りの詰まらない取るに足らぬことを練習に綴り始めた。

これまで私は書く者ではなく、書くことを運命づけられただけの者であった。それは同時に読まれ続ける者であることを意味した。身の回りの世話をする従者たちは、ただ私の目の色を読むばかりで、何も口からは話さない。耳から悪い言葉が入らないようにと、母様が禁じたのだった。どうしてもやむをえない場合のみ、筆談を行ったが、生活のほとんどが気配を読むこ

とや決まり切った事柄を流れ通りに行うことで進められた。

家人たちの多くは私を恐れているようだった。気味の悪い子供として出来るだけ同じ部屋に居るのを避けていた。箸を少し休めただけでも関わらず、膳ごと下げられるなどのことは従者が変わるたびに良くあった。その度に責められるべきは従者ではなく、私だった。なるほど、読み違えられるのは、書かれ方が悪いのに相違なかった。書かれたモノは常に同じように読まなければならないなかった。たといそれが表情や仕草であつたにしても、誤読されるように振舞う者に非があると私は教えられた。

禅僧の一挙一動が即ち修行となるのと同様に、書を志す者は皆、その生き様の全てが記録され、読み解かれるためであつた。そのように、稗田の家の者は育てられた。特に私のように御阿礼の子であれば尚のこと厳しく育てられる。その短い一生のうちに幻想郷縁起を書き残すという重大な使命があるが故だった。そのことは当然のことではあつたが、それでもなお、漠たる不安は常にあつた。生活に係る不安は私を常に脅かしていた。その不安の先には常に母様がいた。母様は私を手で撲ぶつ訳ではない。一般的な正論と、ただの鋭い視線で貫くばかりだ。

ひととき、母様が心配してくれるだろうと期待して、わざと膳に手をつけなかったことがある。今よりも半分ほどの齡、ごく幼かつた日のことである。都合良く熱まで出た。

従者に呼ばれて枕元に膝を進めた母様は、

——食事をきちんと摂りなさい。

そう密やかな声で言うのみであった。病状を慮る様子はない。ただ冷たく命令するのみで、何か尋ねることもない。

そして、まるで何かのついでのように付け足した。

——恥を知れ。

その語調は叱るというにはあまりに静かであったので、私ははじめ何を言われているのか分からなかった。そして言葉の意味が染み通っていくごとに、熱に浮かされて惚としていた頭が一気に醒めていくのを感じた。

それでもこの春には母様から直に帳面を与えられて、私はひそかに嬉しかった。私は書くために生まれたのに、それまで書くことを許されなかったのだ。

書く者はそれが書くべしと確かに信じられるまで己の内側に言葉を封じておかねばならぬ。ただ散逸するばかりの言葉を紙面に殴りつけたところで残すに値するような価値ある言葉には成らぬ。然るに頭の中で様々な言葉が浮かんできて、それをたつた一つの文章に押し込めることが不合理だとさえ思えるほどに、たくさんの言葉が踊っては泡沫の如くにはじけても私は寂然として震える右の手首をぎうと押さえつけて自分の内側にある言葉を練りつけては押し潰し、一塊の漉し餡あんの如くなるまで言葉の豆粒をかき回し続けた。

明くる朝、そのようにして苦心した文章を母様に見せた。一読した母様はその柳眉りゅうまゆを一厘も蠢かすことなく、ただ、お前のそれは現実に実直なだけの駄文である、とのみ言った。

そうして帳面から私の書いた部分を丁寧に破り取ると、目の前で八つに裂いた。丁寧な所作で、思わず見とれる程の優美さであった。そうしてその冷徹な声を温めぬまと言った。

今少し世を知りなさい。故あつて今までは内観のみさせてきた。人の世の憂きを諮り知れば今一度、言葉の冴えざえとするやもしれぬ、と。

そして、一息の後、付け足した。

——それまでは見苦しきものを私に見せるな、と。

私は母様のその美しき声に所作に、また所業の酷むじさに見とれて、己の何をされているかも杳として定まらぬほどに混迷を極めていた。ただ浮ついた足取りで母様の部屋を後にした。

確かに母様は美しく厳しいひとであつた。綴り方の師匠であり、振る舞いの鑑かがみであり、生き様の手本であつた。御阿礼の子の母としての立派な在り方は何かを常に考え、行つていた。

私はそのことを特段不平にも思わなかつた。ただ、母様を失望させた自分に絶望した。私は母様にきちんと甘えたことがない。誰かに甘えるということとは、自分には関係のない事柄であると弁えていた。否、そう言うよりは、知らなかつたと言う方が正しいのだろうか。確かに私は甘えるという言葉の正確な字義について知らない。それどころか、どんな言葉であつても確

かにこの意味を知っていると確信できることは少ない。

正しい字句の使い方について、私は未だに悩むことがある。特に、言葉を筆を經由して指先から放つのではなくて、不器用な口から音として放つ時に、私はいつでも仕挫しくじつてしまう。手の先は常に写書をして訓練しているから、言葉の使い方についてはそれなりに良く知っているが、私の口はことほど左様にものを知らない。

実のところ、私は母様以外の方とお話をしたことが殆ど無い。言葉は専もつぱらら話すためではなく、記すためにあつた。然るに、人の世の憂きを語り知れと言われたところであつた。凝じつと里の人々を眺めるより他ない。

里の者は実に多様な言葉遣いをして互いの意志を伝えあうようだ。下人げにんには下人の、貴あてなる者には貴なる者の言の葉があり組み様がある。手で書くことばかり長けた私にはその音声は時々意味もなく難解かつ冗長なものに感ぜられた。

どうして人は、口で話をするのだろうか。手で書けばそれだけ記録に残り、また頭でも覚えやすくなるというのに、なぜ他人が、不器用な口先で語ろうとするのか、私には分からなかつた。私にとつての物語る、とは大概の場合、口で話し耳で聞くことではなく、筆で紙へ思いの丈を記すことのみを意味した。己の半生について語るといふことはすなわち、手の先で己の見てきたことを言葉に直して書き記すという以外の意味を持たない。

ともあれ、今の今まで、母様は私に自分の言葉で語ることを許してはくれなかつたのであるから、私が自発的に言葉を出すことが許されたのは、ある種の僥倖であつたと言える。苦心して書いたものを破り捨てられ、見苦しきを見せるなど言われたのであるから、未だ縁起を書くことなど望むべくもないが。

いつ、母様は私に縁起を書かせてくれるだろうか。

早く、書いてしまいたい。

出来うる限りの速度で書き終わつて、重い軛くびきから解き放たれてしまいたいとも思い、さはさりながら然るべき時間をかけて書き付けてやりたいとも思う。幻想郷を支えるほどの書物をこの指が言葉にして紙の上に永遠に残すということはひどく重要な使命に相違ない。阿求の代の幻想郷縁起は不出来であると後の批評家に言われたくはなかつた。

それでも、書くことは大層怖い。私は書くために生まれたのであるから、書くこと、読まれることは生き方を試されているような心地になる。そして母様に言わせれば、私の文章は『現実に実直なだけの駄文』で、みたくもないほどの『見苦しきもの』であるらしかつた。

どのようにすれば、そうではなくなるのか、母様は直接教えてはくれなかつた。だから自分で想像するより他ない。母様にとつての良い文章とは常にこれまでにある幻想郷縁起のことであらうし、私も出来うる限りそれを真似るようにして日々のよしなし事を帳面に綴ることしか

出来なかつた。

家人の生けた花の色。うつすらと花卉の上に浮いた筋の、巧みに入り組む有様。目に見える隅々まで書こうとすれば頭の中でまとまらずに疼痛すら感じる。目に見えるありとあらゆるものが自らを書き表すための言葉を持っている。視覚として私の目に入ればそれは澱おぼりとなつて自分の中に積まれていく。

言葉はそのように厳いめしく恐ろしく私の頭の中を押し殺すように在つた。いくら筆の先からはき出したところで後から後から沸いて出る重苦しい水銀の毒のようなものだった。

それでもその春の日々、少しずつ文章を書きつけていくうちに自分の中の言葉を筆先に載せて綴ることは少しばかり愉快なものと感じられるようになった。細い綱の上を恐る恐る歩いていくような心地で、紡いでいく。今の私は綱から落ちていくことすら気づかないていたらく為体ではあるものの、何かを真似て作っていくことは確かに何なに某がしかの手応えを感じた。

たとい駄文であろうとも、目の前にある何かを言葉の形に直して、紙の上へ書き付けていく作業は、物事を腑に落ちやすくした。言葉の形に直されて初めて、私が見たモノは確かなものになった。移ろい変わってゆくものが一つの動かない言葉に直されることは、まるで黒々とした御影石みかげいしの中に世界を閉じこめることのようにも感ぜられた。

曖昧模糊とした世界に色を付け、輪郭をつけていくのはいつでも言葉だった。言葉がなければ

ば目に見えても感じず、耳に聞こえても届かない。字を書き連ねるのに慣れるうちに全ての物が言葉で表せるように感じた。私の言葉はまだ拙い。けれど私よりもずっと優れた言葉の遣い手であれば、この世のありとあらゆる事柄が言い表せるように感じた。

そのようにただひたすら言葉を書き連ねて、私は十二の春を終えた。樹の上で桜の花が咲いて散るのを知りもせず、私は一心不乱に帳面の上へ文字を書き連ねていた。

里の夏は暑く、稗田家の夏もまた例外ではなかった。

隣家で鳴る風鈴の音だけが涼やかな唯一のものだった。既に温くなってしまった濡れ手拭いを右手首に当てて私はひととき休んでいた。

書き付けた帳面は、この春から数えて十を下らない。生きている間に見たもの全て、頭の中にある全てを紙の上へ書き出して、なおまだ書き足りなかった。見たモノを決して忘れない程度の能力をもつてすれば、書き付けること自体が必要ないはずだが、だとしても私が死ぬばいずれ無くなってしまう。転生前の記憶は霞がかかったようにおぼろ朧げであるが故に、私の筆は焦り、滑ったように字を書き付けて止まらなかつた。

言葉が尽きるより先に、先ず右手が壊れた。およそ一刻の間止まらずに書き続けると、手首がひどくひりついて痛み、動かせなくなつた。初めのうちは赤く腫れて痛むその場所へ、薄荷

油を垂らして湿らせた布地を貼り、なおも書き続けた。

症状は悪化し続け、書くのを止めなければ口で筆をくわえて書くより無くなると医者に脅されて、やむなく半刻に一度、手を休めることにした。

麦茶でも持つてこさせようと思つて、短冊に一筆さらりと書いた。廊下に出しておく。気づいたものが持つてくるだろう。急げとは言わない。

何かが欲しいとき、どう言えば良いのか私には分からない。ああ、喉が渴いた、とでも無邪気を装つて子供のようによれば良いのか。あるいは大人がそうするように、申し訳ありませんが、麦茶を一つお願いしますと言えれば良いのか。この形式と格式に満ちた家の中で口にすべき言葉の様式、すなわち文体について、悩まないということはない。だから、ただ短冊に一筆書いて出す以外の方法について私は知らなかった。

汗ばんだ額に張り付いた前髪をそつとかきあげて、飾り気のない髪留めでおさえる。凝つた肩を小さく回して和らげる。少しでも早く回復して、多くのことを書き上げたかった。それでもこれが縁起のための練習でしかないことは口惜しかった。

未だに私は縁起を書くことを許されずにいた。母様が許さなかつた。初めての文章のように破かれこそしないが、お前の文章はまだ他人に読ませるほどのものではない。代々の御阿礼の子が残してきたほどの美文ではない。そう言つて、縁起を書かせなかつた。

何を言わんとしているのか分からないではなかった。残された縁起は何代も後の御阿礼の子たちの見本となる。中途半端な物は書けない。それは自分でも分かっていた。自分の力が足りないことが口惜しくて、書くのを急ぎたいのに、ままならない自分の体が齒痒かった。自分には圧倒的に何か足りないのに、何が足りないのか分からない。休む合間も眉根を寄せて、次を書くべき内容を頭の中で繰り返し練っていた。頭の中に半紙と硯と筆とを並べて、文字を一つ一つ浮かべていく。

暑い夏の日の中で、私の額からゆるりと汗がしたたり落ちて、畳の上に染みを作った。その黒々とした染みをどう言葉で表すか、一瞬の逡巡の故に、頭の中の半紙からふつと字が消えた。その隙間を縫うようにして、声が鼓膜を震わす。

「号外一、号外だよー」

のんきな声が外で響いているのに気がつく。それほど遠くはない。顔を上げる。縁側の向こうに姿はない。

号外、とは何だろうか。何か物売りの類だろうか。伸びやかに響くその声はひどく涼しげで軽やかだった。青い空の中をどこまでも遠くへ駆け抜けていくような、力強くはつきりとした声。すうつと伸びて皺一つ寄らずに若々しい。

もつとその声を聞きたいように思った。聞いて、書いてみたいと。

私はゆつくりと立ち上がって、ひさしの外へ手をやった。生白い肌の上に夏の熱線が照る。それでも外へ出ただけで火傷してしまうほどではない。ついでに中庭で少し体操でもしようかと思つて、草履を突っかける。青い空を見上げてまばゆさに目がくらんだその瞬間、それは降つてきた。

「……っ！」

眉間に直撃する。避ける暇はなかった。それほどの反射神経が無いとも言ふ。

数瞬遅れて鼻の頭を押さえた私の肩から頭から、ばさばさと大量の紙束が落ちる。配つている最中、束になった新聞がばさりと落ちてきたようだった。薄灰色をした、質の悪い紙に刷られたそれは、夏の日に照らされてきらきらと輝いているように見えた。これはぶつかつたのが意外に痛くて涙目になつていたせいもある。

空を再度見上げるが、何もいない。呼ぶ声もいつの間にか遠くなりつつあつた。『号外』を配つていた者が落としていったのだろう。空から降つてきた件については……ひとまずあまり深く考えないことにする。おそらくは里にまつろわぬ人外の生き物の仕業だろう。そのような生き物がいると言うことは狭い世間の私でもかろうじて耳にしている。

一部だけ拾い上げて見る。

本と言えば御阿礼の子直筆の縁起である稗田の家の者にとっては、極めて希に見る活字であ

る。おそらくはガリ版刷り。独特の掠れ具合と行の曲がり具合から見て、刷り師は相当いい加減なものに見える。

それでも見出しに心奪われた。

『幻想郷 異変特集その四』

後から考えれば、号外なのに特集なのかとか、異変がその一とかその三とか組めるぐらいあるような日常はおかしいんじゃないのかとか、そもそも異変が起きた瞬間に配られなければ号外の意味がないとか、そんな文句が幾らでも入れられるのだが、その時の私にはそんな余裕はなかった。

たちまちのうちにその本文へ読み入っていた。夏の強い日差しの中であることも忘れていた。私の初めて見る、この家の外の文章だった。母様や稗田の一族が書いたモノ以外の文章はひどく歪で、しかし新鮮で刺激的だった。紙面には見慣れない言葉が多く踊っていた。一読しただけでは意味が分からないカタカナ語や俗語の類が多く、全てを理解するには時間がかかりそうだった。それでも書いた者の自由な発想と伸びやかな文体とが胸の内に響いてきて、知らず知らずのうちに頬がゆるんでいく。

文章というものは堅苦しく、眉を八の字にしながら解説していくものだという自分の先入観とは真逆の価値観だった。

文字が躍る、跳ねる、笑う、喜ぶ。書かれた字面がまるで生きてるように紙面でその体を活かす。活字、そして字体、という言葉を表すように、それ自身が文章の愉快さ滑稽さを活かすように奔放で、それを読むだけで胸が弾むような心地がした。

はっと顔を上げたとき、ぐんにやりと視界が歪み、頭が眩々くらくらした。日射病寸前だったのだろう。落ちていた残りの新聞をかき集めて、室内の日陰に入る。こめかみが脈打つように痛む。

誰にも見られないように自分の物入れに押し込んだ。不自然にふくれあがって引き出しが閉まらないので、子供の頃から大切に取っておいた好きな色の千代紙ちよがみを全部出してしまった。いつか自分が縁起を書いたときに表紙に貼ろうと思つて密かに取っておいたものだった。自分だけの秘密が初めて出来たようで、胸が高鳴った。

新聞のうち一部だけを取り出して、もう一度読み通す。朱墨しゆずみと面相筆めんそうふでを取り出して、自分の分からない言葉に線を引いていく。後で書店へ辞書を誰かに取りにやらせよう。

調べていくうちに明確な誤植や文法的な間違いも発見した。それでも、その文章を何度でも読み返しては、そのたびに笑みがこみ上げてくるのを止められなかった。夢中でむさぼるようにして私はその薄い号外を読みあさった。

末尾の編集後記からは、この新聞は天狗が書いたこと、その筆者の日常の一コマなどが伸びやかで自由な文体で書かれていた。筆者の名前がどうにも発音出来なかった。新聞自体も大層

おかしな名前であるのだが、梓外にふりがなが振つてあるおかげで、読めた。

『ぶんぶんまるしんぶん文々新聞』というのがその新聞の名前であるのだが、『射命丸文』というのは果たしてどこまでが名字でどこからが名前なのか、私には皆目見当がつかなかった。

夜は従者が誰も来ないことを確認してから、枕の下に敷いて寝た。誰にも分からないように小さく折りたたんでおいた。その新聞の夢が見られればいいと思つたけれど、なかなかそうは行かなかつた。それでも毎日私はその文章と夜を共にした。

日が改まり、辞書を引き読みうちに、少しずつ言葉の意味も分かつてきて、やがて私は自分の手でその新聞の文字を写してみようという気持ちになつた。書いた者の気分になつて書を写すのはこれまでも何度か試したことがあつた。単に読むのとはまた違つた風合いで楽しめるような気がして始めたけれど、これが難しく面白かつた。

私には書いた人物のことが分からない。阿一なら阿一の記憶がごく臆気ながらあるし、知らないところは歴史上残されている事実を元に空想すればいいのだけれど、名前の読み方さえ知らないような人物のことをその文章だけから思い浮かべるのは不可能に近かつた。

そうであつても、頭の中で好き勝手に筆者の像を作るのは楽しかつた。句読点の打ち方からせつちかちだろう、であるとか、誤字脱字を気にしない豪快な性格だとか、意外に送りがなの統一はしているあたり、繊細なのかもしれない、とか。

いつか会いたい、一目でも見てみたい、そう思い始めるのに時間はかからなかった。

最初に新聞が落ちてきてから、十日ばかり経った頃のことである。

私は写書にも身が入らず、自分の帳面も筆が進まず、ただぼうつと新聞の筆者のことだけ考えて文机の前に座っていた。残暑もいよいよ厳しく、太陽は何かの腹いせのようにかんかん照りを続けていた。

「号外―号外だよ―」

それは、唐突に聞こえた。私はあわてて庭先へ急いだ。

空を見上げて待つ。首が痛くなって少しおろしかけた瞬間、黒い羽根がひらりと落ちてきた。再度見上げた刹那、目の前を駆け抜けていった影は明らかに天狗の、少女の形をしていた。

気がつくと、私は生け垣の隙間をくぐり抜けて、彼女のことを追いかけていた。

なぜそんなことをしようと思ったのか、分からない。ただとにかく、彼女を捕まえなければと思った。

立ち止まって書いて突きつけるほどの暇は無い。少しでも目を離したらすぐに飛んでいってしまいうさだ。

だから何をどう言えば良いのか迷う暇もなく、私は叫んでいた。口から自然と言葉が出たのは、ほとんど初めてのことだったかもしれない。

「そつ、その天狗、止まりなさい！ 止まりなさいつ！」

全力で叫んだつもりでも蚊の鳴くような声しか出ない。生まれてこの方、大声を出したことなど一度もないのだ。

「はあつ、ぜえつ、そ、そのの……てん、ぐ」

さらに言うなら全速力で走ったことも一度もない。御阿礼の子は虚弱体質なのである。筆に係る修行においては厳しく育てられるが、肉体的には日も当たらぬ屋敷の奥でまさしく箱入りで育てられ、箱に閉じこめられたまま死んでいくのが私という生き物である。つくづく夏の炎天下を走るには向いていない遺伝的体質であった。

「てん……ぐ、とま……」

貧血で倒れそうになりながら、それでも走る。足がもつれて今にも転びそうだった。目の前がだんだん霞んできて、もはや何のために走っているのかわからなくなりつつあった。

鼻先ですれ違った里の人間が今にも死にそうな私を見つけて叫んだ。

「おおつ、御阿礼の子が走っている！ これは大事件だ！」

そのとたん、上空でほとんど豆粒のようになりかけていた、天狗の影がびたりと止まった。

逆にだんだん近づいてくる。

安心したのか、自分の足が独りでに止まった。くたくたと地面に座り込む。もう一歩だつて

歩けそうには思えなかった。

大きく羽根を鳴らして、目の前で天狗は降り立った。

高下駄とも靴とも判別がつかない不思議な履き物を履いているせいか、それとも私が地べたに座り込んでいるせいか、見上げるほど巨大に見えた。黒いスカートの中が見えそうで見えない。まあ、別に見たくもないけど。

すらつと長く伸びた脚は大変な美脚と言えたけれど、その丸い膝小僧は少しだけすりむけて絆創膏が貼られている。まだお転婆盛りの少女と言って差し支えないような年齢に見えた。

へたり込んでいる私の前でカメラを構えたまま、その天狗は言った。

「はい、チーズ」

軽やかな音を立てて、シャッターが切られた。まばゆいストロボも焚かれる。何がなんだか分からないうちに、五、六枚は撮られた。

ずい、と名刺が差し出される。当惑しているうちにくしゃくしゃと手の内に押し込まれた。ついでに謝礼のつもりなのか、紙に包まれたあめ玉も握らされた。夏の暑さに溶けてちよつとべたべたしていた。

「清く正しいジャーナリストの射命丸文しやめいまるあやです。取材のご協力をお願いします」

そのときに私は初めて、彼女の名前の読み方を知ったのだった。しやめいまる あや。私に

とつて大切な名前になる。

清く正しいジャーナリストは写真を撮ってから協力を要請するのか、と後になってから意地悪く問いつめたところ、彼女は苦笑して黙っていた。どうやらいつものことらしい。

ともあれ、そのときの私は彼女の勢いに圧倒されていた。

文は手帳を取り出して、構えた。その紫水晶の色をした目に見つめられると、ひどく緊張した。「今のお気持ちは？」

「え、えと……どきどきする？」

全力で走ってきたのだから当たり前だ。

「ふうむ、それは恋かもしれないですね」

「た、たぶんちがうと……」

どうしてそうなるのか。

「体が熱くて、狂おしいほどのどが渴いて、白くてどろつとした何かを徹底的に飲み干したくなったりしていませんか？」

「え、えと、」

牛乳は好物だけど、走つてのどが渴いた後に飲みたくはない。

私が答えないでいると、文は手に持った鉛筆の尻をかじりはじめた。いらいらしているのか

もしれない。

「じゃあ、質問を変えます。最近、誰かのことが気になって気になって仕方がなかったりしませんか？」

「あ、はい」

少なくともそれは即答できた。文々。新聞の筆者について気になって仕方がなかった。

「そのひとはどんなひとですか？」

「えつと、」

目の前にいる貴女なんだけだな。そう思うがうまく言い表せない。この人のことをもつと良く知りたい。名前以外にもいろいろ。でも何からどう尋ねればいいのか分からない。まともに誰かと話したこともないのだ。

「また、えつと、ですか」

失望した風にそう言われると、気持ち之急いた。何でもいいから話さなくては。

「あ、あのね、そのひと、すごく格好良くて、頭が良くて優しく、多分本当はちよつと恥ずかしがりなんだけど、それを隠してたりとかして、いっぱい話すんだけど嘘つきなところがあから、他の人はあんまり信じられないんだけどそれを私だけが信じてあげたりとかそういうこともかもしれない、って思うんです、よ」

口を挟む隙を与えないように、立て続けにしゃべった。普段しゃべり慣れないせいで、口がひどく渴く。舌と上あごがくつきそうになってから、私はようやく黙った。

こんなの想像、いいや妄想でしかない。自分の話した内容を改めて思い返して赤面した。

「へえ、ステキですね。まるで私のことみたいじゃないですか」

ほくほく顔で文はメモをとり続けている。どうやら気に入られているようだった。少しだけ期待して、訊いてみる。

「本当にそう思います？」

「ええ。御阿礼の子はいい恋をしてるんだなって」

「だ、誰にも言ったらだめですよ」

あと恋じゃないから、これは。

そう続けようとして、途中で口を挟まれる。

「いや、記事になっちゃいますから」

「えええ、相手も分からないの？」

「相手は適当にみつくるるとききますから、ご安心ください。スクープにガセネタはつきものですから読者だって話半分で読みますよ。それに、」

どうせ貴女は教えてはくれないでしょうし。

文はそう付け足した。

「違いますっ、貴女なんだし」

気がついたらそう口走っていた。はつと口を押さえるが、もう遅い。

「……私？」

自分を指さして確認する。

「いや、その、えつと……うん」

ゆつくりとうなずいた。

誤解しないで欲しい、これは恋愛感情じゃないんだ、純粹に書いているものに興味があつてとか、そういうようなことを言おうか言うまいか、迷うより先に抱きしめられた。

「わあああい！ 貴女、私のファンなんですわね!？」

彼女はほとんど泣きそうに歓喜していた。

「新聞を書き始めてから苦節二百五十四年、ついに一人目のファンが現れましたよ！ 天狗新聞コンテストに出しても出しても落とされ。ついには優勝候補者を弾幕で蹴落とす、審査員に賄賂を渡し、仲間内を宥め^{なだ}賺^{すか}して脅迫してようやく手に入れた優勝トロフィーですら不正行為がバレて没収ですからね！ 私の新聞がどれだけ売れないか、貴女ご存じ？」

一人で突っ走ったかと思えば、質問を振られた。とりあえず首を横に振っておく。

「知らないでしょうそうでしよう、そもそも私の新聞を購読してくれるのは上司にとりもみじとだけですからね！ あとは号外だけおもしろがつて拾い読みする奴らばかりかし！ まあそれだつて押しつけてるだけなんですから読まれてる保証なんてどこにもないんですけどねっ！」

暑苦しいぐらいの口調で話す。私がしゃべるのが苦手なせいとか、こんなに一度に口から言葉が出て行ったら頭が空っぽになつてしまふんじゃないかと心配になるぐらいの勢いだ。特に普通の人妖は見たものをすぐに忘れてしまふらしいから。

「新聞つていうのは定期購読が重要なですよ、定期的継続的に情報をキャッチアップして、最新のニューウエーブをアンテナでぐぐいと拾い上げるのがナウなヤングのコンサバティブつて奴なんですよ、おわかり？」

母様、私は異国に来てしまったのでしょうか。目の前で話されている言葉がまったく分かりません。

「でも、私は貴女の文章が好きだな」

とりあえずこちらも言いたいことだけ言うことにした。あんまりしゃべると口が疲れてしまふから手短かに。

「おおおお、感激感動の雨嵐です。好きとか！ 好き好き大好き超愛してるとか、一度でいいから言われてみたい言葉ベストスリーに入りますけど、実際言われてみたら何度でも聞きたく

なつちやいますね！　いくら自分の書きたいように書いているとは言っても賞賛されると頑張つちやいます。はつ、もしや貴女は神様とか仏様とかそういう類のものですかそれとも悪魔ですか」

「いいえ、人間です」

「なんだか教科書みたいな受け答えだ。」

「おおお人間だったのですか、私には大層まばゆい女神の如く見えますが。何はともあれ神のごとき人間のファン様をこんな熱いところに放置するわけには行きません。そうそう、うちのご近所に美味しいアイスクリーム屋さんがあるのでですよ。よろしければ一緒に」

「え？」

今まで『あいすくりーむ』というものは辞典でしか見たことが無かった。それは概して白くて冷たくて甘くて薫り高いのだという。見てみたい。食べてみたい。知らないことを知りたい。そして書けるようになりたい。

「アイス、行く」

今度は原始人みたいな答えだと自分で思った。

母様ごめんなさい。阿求は言いつけに背いて、知らないひとについていきます。人じゃなくて妖怪だから良いということにしました。

「じゃ、背中に乗って」

背中を向けられた。大きな黒い翼が生えている少女の身体はけして頼りがあるとは言えなかつた。それでも私はこわごわ寄りかかつた。心臓がとつとたつと奇妙なりズムで高鳴つて、口から飛び出しそうだった。

「いきますよー」

脳天気な声。

そして、風音。ふわつと浮く感触。

すぐに落ちていくような感覚。

「きゃあーっつっつっ！」

自然に悲鳴が出た。こんなにかんでばかりの一日は初めてだ。明日には声が出なくなつていてもおかしくない。

地面があつという間に離れていく。下を見ていると落ちますよと言われて、慌てて前を向いた。ぎゅつと目をつぶつたけれど、かえつてその方が揺れに敏感になつて怖くて、目をかつと見開いて景色を脳裏に刻みつけた。豪風に目が乾くけれど我慢我慢。

ばさつと一つ羽ばたけば、その瞬間だけ世界の色が全部混じつて分からなくなる。それも一瞬のうちに流れて、またびたりと空と雲とがはつきり分かる瞬間がある。繰り返す静と動の波。

「うわあ……」

高みへ。蒼い夏の空へ。太陽がぐんぐん近づいてくるような気がする。陽炎も照り返しも離れていく。地面も土埃も泥田の蛙も遠くへ。風音の甲高い唸り。風よりも速く、音よりも速く。飛んでいる、というの、こういうことだ。

妖怪たちはいつもこんな世界で生きているんだ。

初めて体験した世界の見え方が怖くてどきどきしてあわてて興奮して、ぎゅつと強くしがみついた。彼女の細い背中だけが頼りだ。

「そろそろスピード出しますよ」

のんびりした文の声を聞くとほっとした。細くしなやかなその体軀を頼もしいと感じた。

「うんっ」

うなずく。わくわくして、どきどきして、今までにない大冒険が始まっているような気がした。部屋の中で書を写しているだけでは味わえないような、本当の人生が来たような気持ちになる。ぴたりと空中で静止する。

そして、空間を断絶するほどの超高速。

竜巻と台風と木枯らしと大風と春風を全部足して狭い部屋に押し込めたみたいな、ものすごい突風となって、私たちは幻想郷を駆けた。

「いやつつほおおおおおつつつ！」

私の喉から歓喜の叫びが独りでに漏れていた。普段の生活では考えられないことだった。こんな風に叫ぶなんて、自分で自分が信じられない。

文が少し笑っていた。顔は見えないが、肩が小さく震えているのが分かった。

「な、何ですか」

少し決まり悪くなつて、訊いた。

「いいえ。御阿礼の子に喜んでいただけただけで光栄ですよ」

そう言つてまた文は笑う。

「もう、馬鹿にしているのでしょうか」

「いいえ。可愛らしい方だと思つて」

一度声を切る。

「何しろ以前にお会いしたのは、貴女が生まれた時の号外を書いた時ですからねえ」

「えっ」

そんなに長寿だとは思つていなかった。私よりちよつとお姉さんなぐらいだと。

「覚えてないでしょうねえ。ほんの赤ちゃんだったでしょうし、貴方は眠っていましたから」

「う、起きていたらちゃんと覚えてた、と思います」

「ですよね」

そう言つて小さく笑う。何だかからかわれているようで、釈然としなくて、わぎとぎゅつと首をしめるみたいにして強く抱きついた。少しだけ甘いような、汗ばんだ肌の匂いがしてますます落ち着かなくなつた。

気が付けば景色がゆつくりと変わつていた。人里から遠く離れて、木々が広がる。鬱蒼と濃い色をした木々が風に揺られて一体となつた怪物のように見える。見覚えのない光景にひどく遠くへ来てしまつたような気がして、なんだか不安になつてきた。

「もうじき着きますよ」

見透かされたように言われてぎくりとした。

「……妖怪だからといって、全部が全部、人間を取つて喰う訳じゃないんですけどねえ」

苦笑混じりに、彼女は言つた。その声は確かに笑みを含んでいたけれど、一人で吹く風のようになつて寂しかった。

山の麓、切り立つた崖にぽつかりと空いた洞窟の入り口に、そのワゴンはあつた。

白いペンキの剥げたこじんまりとしたワゴンは、タイヤが一つ外れていて雨が降つても風が吹いても、もう二度と動けそうもなかつた。元の姿を想像することも出来ないぐらいにくたび

れきつて、幌として軒先に出されている平べったいビニールは日に焼けて褪色し、所々破れていた。

屋根の上に載せられた、斜め十五度ぐらいに傾いた看板には『あいす☆くりん』の文字。店名なんだろうか。字は丸文字でポップな感じで作ろうとしているのに、赤く垂れたペンキのせいで何となく血文字っぽく見えるので、全体的な雰囲気としては台無しだ。

「にとりー、お客さんつれてきましたよー」

降り立ってすぐに文はそう呼びかけた。

地面に降ろしてもらって、ちよつと一息つく。足下が揺れないというのはこれほどまでにありがたいものだとは思っていなかった。

ワゴンの中から声が聞こえる。

「はいなー、ちよつち待つとくれ。今、ポン菓子が出来……きやあああああつっつ！」

悲鳴と共に目の前のワゴンが、屋根ごと飛んだ。

『どごーん!』とか『ちゅどーん!』とかそんな擬音語が似合う、絵に描いたような大爆発音が響く。ごうううつと爆炎が一瞬、周囲を舐めた。

「えっ、ええええええ……」

思わず絶句。ばさばさと爆風が髪の毛を乱す。炎はすぐに消えたが、未だ熱風は名残を残し

ている。

「あーあ、また失敗ですか。懲りませんねえ」

すぐ隣でくすくすと文が笑う。

「ちよつ、そんな、笑ってていいんですかっ!？」

「大丈夫ですよ。妖怪ってそんなに簡単に死なないし。特にまあ、にとりは河童の中でも丈夫な方ですから」

ひゆるひゆるひゆると風音を立てて、吹き飛んだ屋根がそのまま落ちてきて、すぽつと元のワゴンの上に収まった。一拍遅れて、みしみしつと看板が軋み、『あいす☆くりん』の☆のところが真つ二つに避けて、ずしんと崖下に落ちた。

……真ん中がハート型じゃなくて良かったと思うことにしよう、せめて。

「やーあ、よくきたねい、お客人」

元気な声が、中からする。がちやつとワゴンのドアが開く。平然と、すすだらけの顔をぬぐいながら、青色の髪をした少女が姿を現した。緑色のツナギも何処も破れていない。確かに丈夫だ。並外れて。

「今日はアイスかい、綿菓子かい？ あいにくポン菓子機は一万気圧対応のために改造中でね。ちよおつと刺激的な味がするから止めた方がよいよ」

「要するに焦げてるってことですね」

「大正解っ！」

にとりはびしつと親指を立てて、片眼をつむつてみせた。

「今日はバナラアイスを食べに来たのです。うふふ、私の初めてのファン交流会なのですよ。『人里発、日帰り、おみやげ付き、射命丸文と行くスピリチュアルな旅〜河童特製バナラアイス食べ放題〜』なのですよっ！」

文にぐいつと肩を抱かれる。顔と顔が近い。体温が熱い。

「おおうつ、なんという！」

にとりはぺしつと眉間を叩いた。

「アレか、ついに文も扇風機ファンと仲良くなる日が来たってもんだね！　ヘタレ文系からクール理系への転進おめでとう！　さあ、まずは旋盤から訓練だっ！」

「うふふ、わざとらしいボケは止しなさい。自分が機械しか友達居ないからって、僻ひがむんじゃありませんよ」

にやにやしなながら、にとりの頬をぶにぶに突く。その間も首根っこごと抱え込まれたままの私。ちよつと苦しくなってきた。

「あ、あのう……」

「しかも人間様のファン様なんですよ、アメンボやミミズじゃないんですよ。ちゃんと有機物であるばかりでなく、温血動物であるばかりでなく、大脳が適度に発達した知的生命体の読者なんですよ、うふふふ」

一体、今までどれだけファンが居なかったというのか。

「ええい、ちくせう、悔しいがアイスの三杯ぐらいはおごつてやんなきゃねえ。めでたいめでたいお前さんの経費で落としくけど!」

にとりが顔を横に振ると、ぶるんつと弾力良くほつぺたが指の間から逃げた。ついでに私も文の傍から離れる。いくら何でもこれ以上苦しいのはいやだ。

そして河童と目と目が合う。じろじろ覗き込まれて、なんだか恥ずかしくなって目をそらした。「んふふー、人里にはアイスクリームが無いだろうね、きつと」

にんまりとした顔つきで、にとりが言った。

「えへへ、特製マシンを見せてあげよう。私のファンにもなるといいさつ!」
ぴしつと人差し指を突きつけられた。

河童曰く、アイスを作るにまず、氷を砕くを持ってせよ。

何が何やら分からないけれど、頼まれるままに洞窟入り口につるつるした敷物を広げた。褪

色して、白も赤も分からなくなってしまうような、見たことのない繊維で出来ているものだ。多分幻想郷の外から流れてきたものなんだろう。

「せーのっ、えいしょっ！」

「にとり、落とさないでくださいよっ、氷に土が付いたらもつたいないんだから」

「分かっているよう、文こそ手え滑らさないで」

声を掛け合う二人の側を見る。

「わあ……！」

奥から二人がかりで持ってきたのは、身長ほどもありそうな大きな氷の塊だった。夏にこんなに大きな氷なんて、見たことがなかった。

「どうして？」

「洞窟の奥に氷室があつてね。断熱材仕込んで、冬の間湖の氷を貯めとくんさ」

にとりが自慢げに言う。

どしつと存在感のある透明な塊。日差しを浴びてきらきら輝いている。

「えいしょつと」

にとりがポケットから取り出したのは手の平に収まりそうなくらいの小振りな鉄の箱。手渡される。

「ボタン押ししてみ？」

言われるままに真ん中の赤いボタンを押す。

がしーん、かしゃん、しゃきん、ぐわっしやーんっ！

箱はそんな効果音と共に変形したのである。

目を丸くしてずっしりと手に装着されたものを見る。絶対重さごと変わっている。持ち手は血塗られたように赤くてどっしり手全体を覆うようになっていた。刃渡りは私の腕よりちよつと長いぐらい。刃の部分が変わっていて、ぎざぎざになっている代わりに鎖が巻かれている。

「てけててんっ！ 折りたたみ式全自動のこぎり『じえいそん丸』♪」

次の効果音はにとりの口から出た。

「十三日の金曜日的なマスクが欲しいトコだけど、暑いから今日は省略ね」

そんな言い訳と共に、全自動のこぎりの電源を入れる。ものすごい轟音とともに氷の塊がぶっつしやーんっつと寸断されていく。

にとりの威勢の良いかけ声が、晴れた夏空に響く。

「でいやあーっつ！ 神技っ、地鋭損雷雪斬っ！」

「まったく意味が分かりませんね」

「魔竜暗黒刃あっつっ！ 永久豪鳴氷雪陣っつ！」

「やれやれ、次はエターナルフォーエクスブリザードですか」

文がツツコミを入れながら、崩れていく氷の塊をひよいひよいと持ち上げて切りやすいように並べていく。

「わああ、すごいっ!」

力の無い私は初めて見る光景にただ目を見開いていくばかりだった。真夏にこんなに大きな氷を見るのも初めてで、飛び散る氷の欠片が冷たくて気持ちいいのも初めてで。

何より。

こんな風に大きな声をあげて、友達と騒ぐのも初めてだった。友達という存在は言葉の上では知っていたけれど、本当にこんな風に誰かと仲良くなるのは生まれて初めてだと思う。

「ほら、阿求。氷を砕くのも楽しいですよ」

持ち手のついた先の尖った金属の棒を渡される。使い方が分からなくて首をかしげて文を見る。

「ああ、アイスピックも見たことないですよね、きつと」

手の上からぎゅつと握られる。汗ばんだ手がしつとりと張り付く。柔らかい。後ろから抱き込まれて、身体と身体が密着する。汗をかいた自分のうなじがなんだか急に恥ずかしくなる。

「危ないから気をつけて」

ぐつと振り上げて、氷に突き刺す。びしつと跳ねた大きな塊が眉間に飛ぶ。痛い。

「……あう」

「あ、大丈夫ですか？」

「んっ！」

こつくりうなずいた。ぎゅつと手の中の武器を握りしめる。氷ごときに負けてなるものか。きつと私に足りないのは、覚悟だ。

「うにゆうーっ！つ、え、えたーなる……なんだっけ、えつと……な、なんとかーあつっ！」

自ら氷めがけて振り下ろす。手応えはぼつちり。確実に真芯を捉えた。故に、相手は死ぬ。

「ひようせつ、えつと、なんとか、うんと……とつ、とにかく、うにゃあつ、しねえーっ！つ！」

ざくざく。多少ぶれたりはしているけれど、確実に氷は飛び散っている。

「はあ、ふう……こらあーっ、しねえーっ……はあ、ふう……こつ、こおりいーっ！ ばかーっ！」

動かしているうちに息が上がってきて、腕がだるくて、もう上がらなくなる。

ふと顔を上げると、文が目を丸くして見ていた。

「あ」

「あ？」

ゆるゆると自動的に動くのを瞬きもせずに見ていた。

周りの氷に塩が混ぜられる。そうすると少しずつ、外側の鉢の縁に白い霜が凝ってくる。温度が下がっているのだと見た目で分かる。

「すごい、雪みたい」

指先でこわごわ触ってみる。すうつと表面をなぞるだけでふんわりと柔らかかそうな氷の結晶が爪の先につくけれど、それも直ぐに解けてただの水滴になる。

「なんだか騙されてるぐらいに、不思議な感じがした。」

「えへへ、いいでしょー、わたしのファンになった？」

得意げなにとりに向けて、こくこく頷く。これはすごい。こんなの見たことない。

「あ、氷足りないかも。もうちょっと取りにいこつか」

手を引かれるままに、にとりと二人で洞窟へ向かう。

暗がりにも目が慣れるまでおずおずと歩を進める。日陰に入るだけで少しひんやりした。

微かに澱んだ湿り気の中、不意に立ち止まる。二股に分かれた反対側には、木で出来た、不似合いに重厚な扉が見える。

「ここは？」

私は問うた。

ひどく恐ろしい気配がそこに在った。得体の知れない怪物がその黒檀の扉の向こう側に眠っているような重苦しい空気が漏れだしていた。真鍮の鈍い輝きを放っている小さな取っ手に触れてみると、まるで死体のように冷たかった。

「ああ、そこは書庫だね」

にとりが味見用のスプーンをくわえたままでそう言う。はじっこがぴこぴこ揺れて、暢気だのんきった。

妖怪はいつでも伸びやかで気楽だ。どんな怪物がそこにいたとしても、それもまた同族であるからなのかもしれない。

「昔の文献や新聞の縮刷版なんか眠っているんだって。ほとんど読まれないけどね」
「……そう」

この場所を恐ろしいと感じているのは私だけなのだろうか。
「入ってみてもいいよ。御阿礼の子なら面白いかもしれないね」

鍵束を差し出される。

受け取るべきかどうか、悩んだ。途方もない言葉たちがそこに眠っているような、そんな気がした。

「……いいです」

その場所は、怖かった。忘れられた言葉たちと向き合うよりは、ただ笑って遊んで過ごしたかった。言葉なんて、無かったことにしたい。あの暗くて重い倉の奥には読まない言葉が重く渦巻いていて、入ったら飲み込まれてしまうような気がして、背筋がぞつとした。

足早にその場を立ち去る。けれど何か得体の知れない引力が着物の裾を掴まえて離さないような気持ちになった。

戻って、カップに入れてもらったアイスは美味しかった。ちよつとまだ固まり方が足りない感じはしたけれど、甘みがふんわりと口の中に広がって、幸せな気持ちになる。ふんわりと口腔をかすめていく香りも気に入った。

でも心のどこか、端の方で、あの書庫の中のことが気になって仕方がない。ぼうつと手を止めてしまっていた。

読まない言葉。命を削るようにして書かれても、誰の目にも触れないままで、燃やされるわけでもなく暗い穴蔵に貯められて、じつとりとした冷たい中で光の差すのをただ待ち続けている。そのことを思うと気持ちがいびきと暗闇に落とされていくような気がする。

「阿求、垂れてますよ」

「え、あ……」

左手の甲にまで解けたクリームが落ちてきていた。

お行儀悪いけれど、そつと舌を延ばして舐めとる。

「ああもう、今度はほつぺたについてます」

くすくす笑つて、顔が近づく。

「ふえ、……つわ……」

ぺろんと、犬みたいに。暖かな、柔らかな、舌先。ほつぺたを舐めとる湿つた感触。息がかかつて熱いくらいだつて、そんなことを思った。

「あ……つ」

息を呑んだ。すぐ近くにある紫水晶の瞳。白い肌。

きれいだつて、素直に思つて、それからすぐに顔が急に熱くなって、何故だか世界がぐるぐる回る。頭の中がぎゅうつと締め付けられるように痛くなつて何にも働かない。のぼせきつて、目の前が真っ白になる。

遙か昔に得た重くて切なくて遠い記憶が幕一枚隔てた向こう側にある。何か、得体の知れない怪物のような気配が、頭の奥からきいんとした冷たい呼び声を響かせている、そんな気がした。

「あ、ひよつとして」

「日射病……?」

二人の声が遠い。

「……きゆう……」

のどの奥が変な音を出して、世界中がいつぺんに暗転する。

夢を見た。

そつとおとがいを持ち上げられ、じつと顔を見つめられていた。

ふつくらと柔らかかそうな唇。澄んだ濃い紫水晶の瞳。端正に磨かれた頬の輪郭線。桃のよう
にうつすらと色づいた稜線の産毛まで見えるほどの距離に近づく。

「は、初めてだから、やさしくしてください」

恍惚としてそんなようなことを口走ったのだけ覚えていた。

「だばー！ー！ーっ!?」

自分の奇声で目が覚めた。

がぼつと起きあがって周りを見回す。自室である。すがすがしいほどの早朝だった。小鳥が
ちゅんちゅんさえずっている。

枕元で朝の支度をしていた従者がぎよつとした顔で見つめていた。

「え、えへへ……」

照れ隠しに引きつった笑いを浮かべてみせると、彼女はますます困惑した顔で黙つたまま後ずさつて部屋から退出した。

あまりにも恥ずかしくて布団の中に埋もれてしばらくじたばたしていた。あーとかうーとか、そんな言葉しか出てこない。

……朝からテンションがおかしい。

初めて見たえつちな夢のせいだ。絶対そうだ。相手が文なのがもう何にも言えない。キスとか、なんでだ。ああもう訳が分からない。

「……てゆーか、突っ込んでよう」

変な夢でも見たんですか、とか、何でだばーなんですか、それが乙女の上げる悲鳴ですか、とか、従者たちにそういう反応があればもう少し恥ずかしくないだろうに。我が家にはもう少し親しげな交わりというものが必要なのではないだろうか。

そんなようなことを思い、そこではたと気がついた。

どうやって戻ってきたんだろう？

小さく首をかしげる。枕元に丁寧に、いつもの書き物帳が置いてあつた。書き置きが挟まれているのに気づく。

『今日は暑い中、射命丸文と行くアイス食べ放題の旅く食つて食つて食いまくれ お腹をこわ

しても知らないぞ☆にご参加頂きまして誠にありがとうございます。お客様のうち急病人が出たため近くの搬送先までひとつ飛びさせていただきました。なお、お土産としてご用意させていただきましたアイスクリームにつきましては溶解の危険性がございますので、当方にて美味しく処理させていただきましたこと、深くお詫び申し上げます。**お代わりあるからそのうちまたおいでー！……こほん、うちのメカニック担当が失礼致しました。**ではまたのお越しをお待ちしております』

こほんつて……書き文字で。お手紙で、こほんつて。途中、きつとにとりが書いたんだろう、一カ所だけ字が明らかに違うし。

こんな書き方、見たことない。こんな風に、自由に奔放で、思ったことや口にしたいことそのままに書くやり方なんて、知らない。

妖怪つて、すごい。

「すごいんだ……!!」

空いた片手をぐつと握りしめる。会いたい。もつと会って話がしたい。

たくさん知りたいことがある。どうしたらそんなやり方が出来るのかって。口の言葉と筆の先の言葉が一緒になるなんて、本当にすごいことだ。思ったことをそのまま言葉に出来るなんて。自分の想いはいつでもふわふわして定まらなくて、一つの特別で簡単な言葉に置き換え

るなんて、今の私には到底できっこなくて。

それが出来る文はすごい。

「……ホントに、すごいようっ!」

布団の中でじたばたする。それから、きつと顔を上げて、高く澄んだ夏空をにらみつける。まだ涼しい早朝に誓う。

絶対にまた会いに行こうって。

とりあえず、どうやったら会えるのかについて、勇気を振り絞って、いろんな人に聞いてみた。

証人1 お隣の筆屋さん

「えー? 妖怪の山に行きたいって? 阿求さんには無理ですよ。昨日もまた熱出してひっくり返ってたんでしょ。お母さんが心配するからダメですって。ほら、もじもじしてないで帰りますよー……って、あーあ逃げちゃったし。おかみさんに怒られちゃうなあ」

証人2 はすかいの紙屋さん

「うんうん、わかったからおうちに戻りましょうね、阿求さま。大人になったら行けるかもしれませんし。それまではお勉強に励んでらっしゃ……あら、挨拶もせずにごよならって。もう、最近の稗田家は教育が行き届いてないのかしら」

証人3 二丁目のお箸屋さん

「そうだなあ、とりあえず刺し箸や涙箸をしたら行けないと思うなあ、僕は。ま、一生懸命願って、良い子にしていたら、そのうちにさらつてくれるんじゃないかなあ」

——え、さらう？

「ん、そうだよ。妖怪は悪い人間の子供をさらつて食べてしまうんだ」

にやにやしなながら、お箸屋さんのおじさんは言った。詳しい話が聞きたければ、人里でも有名な貸本屋に行け、と助言までしてくれた。

「昔は僕も散々脅されたっけなあ……今は妖怪も身近な時代だから懐かしい気がするよ」

「あ、ありがとうございます！」

深々お辞儀をして、でもそんな暇も惜しくて頭を上げきらないうちに駆けだす。教えてもらった地図を、汗ばんだ手に握りしめて、息が上がってひゅうひゅう言い出すぐらいに、一生懸命、人里を駆ける。

曲がったことのない道を曲がって。行ったことのない辻を渡って。狭い人里なのだ縁起に書かれているのに、それを何度だつて読んだはずなのに。今の自分の足はくたくたになるぐらいで、汗もたくさんかいて、ノドはすぐからからになって、頭がががんで。それだけ自分の身体が小さいんだって思い知る。人里は一つの広大な宇宙みたいだった。

いつか大人になったら、この気持ちも消えてしまうのだろうかと思う。

前世で私が大人になってしまったみたいにな？ 当たり前のように格式張った幻想郷縁起を書いて、そして疑いもなく転生してしまったみたいにな？ 小さな人里だとただ一文で書いて、その中身を十分見もせずにな？

それが、嫌だとまでは言わないけれど、なんだかひどく寂しいことのように感じた。

私が貸本屋にようよう着いた頃には、日差しは既に西日になっていた。

半ば傾いだ瓦屋根が所々剥がれていて、木の梁がむき出しになっていた。壁を這う蔦は夏の暑さに耐えかねてほぼ褐色に枯れている。はげちよろけの漆で塗られた引き戸が昔はさぞかし儲かっていただろうことを予感させて、逆に哀れさを誘っていた。

「ご、ごめんください……っ」

声が店の奥の闇へ吸い込まれていくような気がして怖くて、途中で口をつぐんだ。

返事はない。けれど硝子のはめ込まれた引き戸は開いている。私はおそろおそろ店の中へ歩を進めた。

外の眩しさのせいで、闇に目が慣れるまで時間がかかる。緑色の斑点が消えるまでしばらく目を閉じた。

この家には死んだ本の匂いが充満している。既に読まれなくなって久しい本たちの呪詛が聞こえてきそうで、私はそつとかぶりを振った。

ごめんなさい、私はあなた方を読んでいるわけにはいかない。もつと他にやることがあるから。ぱちん、と扇の閉じる音がして、私はそちらへ顔を向けた。目を開ける。

「なんですすかいのお」

でつぷりと太った剃髪の男がそこに腰掛けていた。肌が異様に白く、餅のようにねっとりした光沢を保っている。顔全体が肉で出来ているかのようにもっちりとしていて、目も針金のように細い。その顔は福笑いや騙し絵のように、笑っているようにも怒っているようにも見える。「今は子供向けは休業しとおんね。悪いけんどお帰りあそばしやあ」

語気はけして鋭くない。だが鈍く重いものをぐりぐりと押しつけられたような、奇妙な圧迫感がある。

ぐつと拳を握りしめる。手の内に汗。

「……妖怪のことを聞きに来ました」

唾を飲み込もうとしても、口の中がからからで、うまく話せない。

「妖怪？」

「妖怪の山に、会いたい子がいるんです」

「ぼほ、ほうう……」

ぼふふと何か空気がはじけるような音がした。何かと思えば表情が微かに崩れ、肩が震えている。笑っているらしいのだと、しばらく遅れて気づいて、ひどく不快な気持ちになる。自分の声が尖るのを抑えられない。

「……おかしいですか」

「ぼほふ、なんに、おかしくはないね。妖怪は金になる、ぼほ、ぼほほ」

「こんな生温いご時世だからね。」

貸本屋はそう付け足して、ぺろりと唇を舐めた。そこばかりが紅でも差したように変に色鮮やかで、気持ちが悪い。

「いいですよお、ちよいと良いもん貸しましょ。ヒントあね、妖怪ポスト。古典的だけど、これ、もう確実」

ゆつくりと腰を上げる。体を動かすごとに家全体が僅かに傾いだ。主人が重いのか、家屋が崩壊寸前なのかについては判然としない。

書棚の高い所から、一冊の草紙を取り出す。

「賢い賢い御阿礼の子なら知つとろおけんどね、貸しつて言葉あ、返すつて言葉と対になつとらんよ」

笑みが、深くなる。

「これあ、大人の御本だから、貸し賃は高い高い。大事に扱わにゃ」

はらはらと眼前で捲られる。内容は見えない。ただ表紙に多色刷りの女の絵。媚を売るようにこちらを見て、僅かに自分の襟元の合わせへ手をかけている。

「辻売り、おっと、子供には妖怪ポストと言わなきゃならんね。それを呼ぶ為の場所が五十三の項に書いてあるから使いなせい。ただし、他の所は読んではいけない」

もしも読んだら、その先のことは知らない。

ねっとり絡み付くような笑い方をして、店主は言った。またちろりと舌なめずりをする。

その視線が明白に私の襟の合わせへ向いているのを感じて、肌が粟立った。

「……ありがとうございます」

礼をして、奪い取るようにしてその本を手を取った。これ以上そこに居るのは耐えきれなくて、逃げ出した。

帰るとすぐに母様に呼ばれた。借りた本だけ物入れに隠してすぐに赴く。

母様の自室にはおよそ生活感というものが無い。正方形をした小さな部屋。小さな文机が一つあるきりで、それも片袖の簡素なものだ。抽斗の中に全ては行儀良く整理良く並べられてお

り、卓上には塵一つ無いほどに整えられている。視線を落としている帳面の表も濃紺をした落ち着いたもので、私のように華やかな千代紙などは使われていない。

そして鼠色をした座布団がその向かい合わせに据えられている。

遠慮がちに座して進む。腰を落ち着けてなお暫くの沈黙は耐え難い。耳の奥に硬くて小さな氷でも入れられたように痛むような心地がする。

やがて、凜とした声音で問われる。

「今日は何処へ行つてたのですか」

簡便な言葉の内側に、良く研がれたような語調。

「……人里へ」

何処へも行っていないと嘘をつくことは出来なかつた。その刃の様な視線に貫かれるだけで、全てのまやかしが露見してしまふような予感があつた。

「何の為に？」

「書く、為に」

語尾がかすれた。母様の前に出ると、いつにもまして言葉が出なくなる。書くときと同じように己の内側にある言いたいこと、言わなければならないことが喉元で止まって、出て行かなくなる。凶暴な程にわだかまっているのに、突き破りそうに蠢いているのに、唇の外へ出て行

くことはない。

気圧されたように後ろへ指の半幅分ほど下がり、居住まいを正した。それでようやく呼吸だけは出来るようになる。

母様はなおも問う。

「何を、書くのですか」

「それは、」

本当ならばそれを探しに出ていったのだということを、言いたい。けれど言つてしまえば、己の無才を公言するようで更に母様を絶望させることになり、何より、己の中には書くための何も無いということを確認化するような論調にもなり、自分の役立たずを赤裸々にするようで、何も言えない。

「……その、」

喉の奥で、何かが降りていきそうで降りていかない。大きな梅の種がつつかえたままのように、何度唾液を飲み込んでも無くならない。吐き出すこともままならないで、息が詰まりそうになる。まともに呼吸することも出来ず、無意識のうちに肩が少し上がっているのに気づく。膝のあたりに垂れている、刺繍のあるたもとを握りしめて、うつむいて、目を閉じる。

何を、書くのか。

何を、どう書くのか。

どう、言えばいいのか。

どう言えば、聞いてくれるのか。

どう書けば、読んでくれるのか。

読まれないままで、消えていかないためには。

洞窟の暗闇の奥底へ仕舞われてしまわないためには。

古く老いぼれた貸本屋の奥で埃を被つて片づけられてしまわないためには。

何を、どう。

「——わかりました」

母様は何かを断つような声で、そう言った。

「ともあれ、白昼残暑厳しい折にむやみに出歩かぬように。身体に無理が掛かればそれは筆の先にも顕れます」

そうして、にこりともせぬまま鋭い眼光で威圧する。情のない、抑制の効いた良く通る声。

「御阿礼の子は、世に残る物を書かなければなりません」

「……わかつて、います」

わかつているからこそ、こんなにも苦しいのに。

それを口にすることすら許されない。

「ならば、そうなさい。望まれていることをしなさい」

話はそれで終わりのようだった。母様はそれきり黙って、手元の文机へ視線を落とす。しなければならぬ書見があるようだった。それが始まると、私はいないものとして扱われるのが常だった。

私はゆつくりと後ろへにじり、部屋の外で今一度、母様を見た。膝をつき合わせて会話をした最後に、今ひとたび、母様の顔を見ておきたかった。

視線は、合わなかった。

母様の目はあくまで書に向かったままだった。

どこまでも私のことを見てはくれない。

己の未練を断ち切るようにして、襖を音もなく閉ざした。

深夜の闇、貸本の五十三項に従って見よう見まねで術を練る。他の箇所は言われた通りに読まなかった。なにより、自分の部屋に帰ったらすぐに気絶するようにして仮眠に入ってしまったからしつかりと眼を通す時間もなかった。ただばらばらとページをはぐったぐらいだった。中庭。猫目月ながら煌々こうこうと月光差す夜。空気は真夏の気怠い熱を孕みながら浮ついている。

まじないごとをを行うにうつつつけの夜。

月の満ちた分に相当しただけの量の砂糖をかわらけに盛り、中央を僅かに窪ませる。温度を丁寧に測った微温湯ぬるまゆを注ぐと、釉薬のない陶器の膚の上に緩く粘性の液体が張る。うつつりとして揺らめく水面の上に呪言の書かれた札を浮かべて、一つ二つ渦巻き状に撫ぜながら、こほんと言つて咳払いして、文のことを思い浮かべながら魔法の言葉を言う。

「『姉さん、事件です』」

その瞬間、大竜巻が来たと思つた。

豪風と共にフラッシュ。カメラの眩く照る閃光。

「じじじじ事件はどこですか、事件は会議室で起きてるんじゃないやなくて現場で起こってるんですか、現場は被害者はどこですかっ！」

あたりを見回してとりあえずぱしやぱしや撮りまくって慌てふためいている文に、どう説明したらいいのか迷う。

「えーと、」

「あ、あれ、どうしたんです、阿求さん」

きよとんとしている。

「こんな昔風の、音飛ばしのおまじないなんて使って。よつぽど大急ぎで私に会いたかつたん

ですか？」

「だって、ほかに方法知らないもの……」

そう言った私の目の前に、文は新聞を差し出した。指で欄外を指す。

「ここに、投書の宛先が」

『本新聞についてのご意見ご感想は、お近くのカラスまでお気軽に』

「な、なんですとーっ!？」

思わず顔が劇画調になりそうなほど衝撃的な一言だった。何度も何度も読み返して書き起こしていたはずなのにどうしてそこだけ見落としていたのだろう。

「……ファンレターとか、出してくれたらよかつたんだと思いますよ。きつとすぐに第二回フアン交流会とか企画しましたから」

慰めるような優しい口調がますます切ない。何だつたんだろう、暑い中走って、あの気持ち悪い店主にじろじろ見られて、母様に怒られて。

「ううう、文さんのほかあ……」

とりあえず八つ当たりしてみた。何となく許してくれるような気がして。

案の定、文は慌てた様子で私の肩をぎゅつと抱く。

「ほ、ほら。可哀想な阿求のために何か、してあげましょう」

「な、何かつて何ですか」

「たとえば……夜空の空中散歩とか」

言うなり、大きく翼のはためく音。

「えっ」

声を上げた。反射的に身を縮こまらせる。その体軀を優しい腕で包まれる。ふつと浮いた。とくとくと鳴る心臓の音。柔らかな少女の肌はどこか石鹸めいたさわやかな香りがする。ゆつくりと夜風が頬をなぶる。夏の夜の熱気をはらんだ空気が心地よい風になる。先日 of 突風のよくな飛び方と違って、ゆりかごのように穏やかに揺れるばかり。

中天、ほどよく上がったところで止まる。上天の空気は地上に比して気持ちよく乾いている。仰ぎ見える星々は黒い天鵝絨ビロードに縫い付けられた宝石みたいに輝いている。冷えた耳朵に触れる文の鼻先もまたひどく冷えているが、こぼれる吐息のこそばゆく触れるのも、肩をとらえた腕も温かい。

人里の灯りは既に絶えて、地に在るのはごく細々とした提灯の明かり。

あれは妖怪の飲み屋の明かりなのだと、文が教えてくれた。深夜まで営業しているヤツメウナギの屋台には、人を鳥目にする夜雀がいる。

なんだか本物を掴まえてみたくなつた。私がそう言うと、文は小さく笑つて、トリモチがい

いでしようね、と返した。

取り留めもないうわさ話とそよ風のようになくすくす笑い。時の過ぎていくのを忘れていくよ
うな気がした。

不意に、頭を撫でられる。

「阿求は、小さいですね」

身長のことを言われているのだと思った。少しだけ唇をとがらして、文を見る。

文句は、唇から出なかつた。月星の静かな明かりに照らされた凜とした顔立ちに、しばし見
とれてしまった。

「小さくて、可愛らしい」

優しく、どこか寂しげな声で文は言った。

「このままさらつてあげられたらいいのに」

何か思い出したようにそう言った。その言葉の真剣さが怖くて、ぎゅつと文の腕をつかんだ。
柔らかな、女の子の腕だった。

「冗談ですよ。そんなにおびえないで」

吐息だけで笑う。

「さ、帰りましょう。阿求」

よしよしをするように頭をなでられる。そのまま離れていく気配が嫌で、私はその胸元に頭をすりつける。なんだかこのまま帰りたくはなかった。もつとずつと一緒に居たかった。どこか行くところは無いだろうか。自分一人では行けないところ。文に連れて行ってほしいところ。

「……書庫」

とつきに口をついて出たのはその単語だった。

骨の髄にまでしみ通っている。書く者と書かれた物の処遇について。

「書庫？」

「氷室に行く途中、見たんです。黒い大きな扉。にとりさんに聞いたら、あれは書庫だって」

「ああ、うん。そう、ですね」

文はぎゅつと下唇を噛んで、何かを耐えているような顔をした。

「そう、あれは、確かに書庫です。図書館というにはあまりにも他人の目に触れなさすぎるでしょうから」

どうにか笑んで見せた。なぜだか悲しそうなのを無理に笑っているような、そんな顔に見えた。

「見たいんですか？　こんな夜更けに？」

「だって、昼間は読書をするには暑すぎるでしょう？」

私はなおも食い下がった。文が何かを隠しているような気がして、ひどく気になった。もつ

と知りたいと思つて、底意地の悪い笑みを浮かべていた。

多分、それが私の本能。知りたいという本能。

知つて、それを書き表して、日の下に晒したいという強い本能だ。

「……分かりました」

文は何か、吹っ切れたように真顔に戻つた。

「いいでしょう。いずれ、あなたには見てもらわなきやならないんだ」

ばざり。大きく羽が鳴る。

「何を見ても驚かないでくださいね」

その言葉はまるで、自業自得なんだから後悔するなよ、と言ひ聞かせられているような、そんな風にも聞こえた。

妖怪の山は昼間に訪れた時よりも恐ろしく大きく見えた。明るい月が煌々と照らす頂は怪物の大きな頭みたいに影を落としていた。

冷え切つた洞窟の中、文に手を引かれて歩く。わずかに汗で湿つていて冷たい。あの文が珍しく緊張しているのが分かつた。

「阿求は、きつと」

扉の前で立ち止まると、文は言った。

「え？」

「書くことを、恐れたりはしないのでしようね」

「そんなことは、ありません」

書くことは怖い。読まれることも怖い。己の生き様を試されているような、そんな気持ちになる。

「いいえ、怖いと思いつつも書き続けているのは、書くのが楽しいからです」

意識下ではなく、本能で。

「その意味では、私も同じ」

私たちは書くために生まれた。そう言っても過言ではない。

「けれどこの奥に居る者に比すれば、大したことはない。我々はまだ生きているからです」
文の手が震えている。

「死してなお何か書こうとする意志の恐ろしさを、阿求も知っておいた方がいいでしょう」

そしてゆつくりと鍵を回す。重苦しく錆びた音が響いて、壁に反響して消えていく。その中はやはり闇。しかし夜よりも遙かに濃い色をして甘い匂いが立ちこめている。

「元来、裸火厳禁なのですが、貴女の目では何も見えないでしょうから」

かさかさと紙の箱のこすれる音。しゅつと焦げ臭い匂い。光。燐寸マツチの火。一瞬にして闇の正体を明るみに晒す。

鴉の濡れ羽色の上に光がつやを返す。闇と見えたものは全て長く長く伸びた髪の毛だった。床の上、壁のおもて、うねうねと長く這い、絡まりながら、膨大な数の本棚の上に覆い被さっている。

「ふぐるまようき文車妖妃という妖怪がいます。手紙や文書に怨念がつくことで生まれるものですが、これはその生まれかけ。まだ子供なので話すことは出来ないし、自分で新しい言葉を書き付けることも出来ません。せいぜい出来るのはその時にうつつけな本を推薦することぐらいです」
音もなく滑らかに一冊の本が髪の毛の上を滑ってくる。表紙に書かれている題名を読む。

『光あれ』

はらりと軽やかな音を立ててその本が独りでに開く。何かの一文を指し示そうとしているその髪の毛を払いのけるようにして、文はその本を手を取った。

「ありがとう、アヤ。後でゆっくり読ませて貰います」

その声はひどく枯れて疲れているように聞こえた。

「……アヤ？」

「私とたまたま同じ名前なのですよ。私が付けたわけじゃないんだけど、ね」

燐寸が燃え尽きる寸前に吹き消した。煙の焦げたような匂いがして、再び完全な闇に戻る。二本目は灯されなかった。

「帰りましょう。これももう残り少ないのです。次に来るときはカンテラを持つてくることにしましょう」

言外に、次があれば、と言われている気がした。

洞窟の入り口を出たところで、文が足を止めた。

「どう、し」

聞きかけたところで、剣呑な光に私も気づく。月明かりを返してきらめくのはいつも自衛に使っている刺股に樫棒。

人里の男衆が四、五人ほど集って取り囲んでいた。口々に叫ぶ。

「御阿礼の子をさらったな、妖怪！」

「天狗はいつたいたいどういう見なんだ。答え次第じゃ容赦しねえや」

「スペルカードじゃ飽き足らないってのか」

その輪の中心には母様の姿があった。一言もない。ただ細く鋭い眼光を私へ向けているばかりだ。

「阿求、お知り合いですか」

尋ねた文はこちらを向かない。凜とそびえるその背中。黒い翼は大きく広げられて月を隠すほどだ。その翼をもつてすれば今すぐにでも逃げ出せるし、ひよつとしたら全員こつびどくぶちのめすことぐらい朝飯前かもしれない。

でもきつと、そうさせたらもう二度と会えないような予感がした。

ぎゅつと拳を固める。勇気を腹の底から呼び覚ます。

「文をそんな風にいじめたら、ダメ！」

手を大きく広げて、刺又の前に立ちふさがった。人々はどよめく。

彼女を全力で守りたかった。

ううん、守るなんておこがましい。そうじゃない。そうじゃないんだ。大事だから、大切だから、一緒にいたいだけなんだ。

つつかえつつかえ、言葉を選ぶ。

「文は、私の」

どう言えがいいのだろう。どの言葉を使えば一番、この気持ちを表せるだろう。

「私の、大切な……」

友達？ 違う。もつと近くて、恋しくて、愛おしいもの。

「大切な」

恋人？ ううん、違う。そうではない。そもそも文は人じゃなくて、妖怪で天狗だ。恋妖怪なんて変な言葉はない。

「私の、大切な……」

そこまで言った瞬間にぴんと来て、私は勢いよく言い放った。

「生き物なんだから！」

その瞬間、一同の動きが一気に凍り付いた。

ぼかんと口を開けたままの若い衆は、まるで私の口からほとばしった言葉の影を見ているみたいだった。

何か、おかしかつただろうか。つなげて考えてみる。

私の、大切な、生き物。

……文法的には別に間違つてはいない。彼女は私にとつてとても大事。そして彼女は生きています。つまり生き物。これらをまとめると『文は私の大切な生き物』ふむ、その通り。

でもみんなの反応を見る限り、何かが違うのだろう。よく分からないけれど、たぶんそんな気がする。

証拠に、振り返って見上げた文は耳たぶまで真っ赤にして小さく震えていた。笑いを堪えて

いるのが丸わかりで、ちよつと恥ずかしくなった。

「……つまり、貴女は」

長く凍り付いたままだったところから動き出した母様が、長い時間をかけて言った。

「ペットが飼いたかった、ということなのです？」

「え、」

そう言われて返答に困る。

別に文はペットじゃない。山で暮らしてる本物の、天然の天狗。

でもペットなら一緒に暮らせるし、抱き合っても不思議じゃないし、ちゃんといい子にしていたら一緒の部屋で寝られるかも。

「……うん」

少しだけ考えた末に、うなずいた。ぎよつとした目で文がこつちを見たけど、首筋にきゅつと抱きついて黙らせた。

「この子、文って言うの。飼っちゃだめ？」

すりすりしながら母様を見上げた。出来るだけ泣きそうな顔を作る。

そんな風に甘えるのは初めてだったけど、うまく誤読されるような表情を作る。そうやって読む者を誘導するのもまた私の本能。

母様は目を細めて値踏みをするようにじつと見ていた。

「……いいでしょう」

ため息と共に、母様はきびすを返す。

「このたびはお騒がせいたしました。皆様、引き上げましょう」

「なんでえ、夜中の昆虫採集みてえなもんだつたのかい」

「稗田の嬢ちゃん、こんなんで騒がしたらいけねえや。いくら自分の子供が御阿礼の子だつてなあ」

「つとによお、ふああ、さつさと帰つて飲み直すか。明日も仕事だなあ、やってらんねえや」

申し訳ありません、申し訳ございませんと頭を下げ続ける母様を見て気の毒には思つたけれど、私は文の手をぎゆうと握つて幸せだった。悪い子だとは分かっているけれど、心の中はうきうきとして止まらなかつた。

文と一緒に。一緒に暮らした。そばにいて、お互いをもつと良く知って、同じものを食べて、同じ時間を過ごして、同じ思い出を作っていくんだ。そう考えると胸の中がぼつと暖かくなる。

「ちよ、ちよつと、阿求……?」

文がおずおずと耳元にささやきかける。

「あつ、ペットはしゃべつたらいけないですよ」

微笑して言った。有頂天になつていた。

「ペットつて……」

「しつ、母様が聞いてるかもしれないから」

先頭を歩いている、女の人にしては高い背丈を見やる。振り返る気配はない。

「ね、文」

くすくす笑いながら、私は言った。

「お願い。しばらくでいいから、一緒にいて」

笑いながら、本気で言った。

森を抜けて人里まで一人で歩き通すことは出来なくて、くたびれてしまった私は途中から文に負ぶさつて帰った。母様はちらりとも見てはくれなかった。でもそれが今まで当然のことだったから今更何とも言わなかった。

母様は私を見ていない。迎えに来たこと自体が奇跡みたいなものだと思う。でもそれだつて、本当は私のために来たんじゃないんだつて分かっている。ただ稗田家の書き手が居なくなるのを恐れただけで、それは人里の共有財産の一つが消え失せるのを気にしただけのことではない。それだから自分一人ではなくて人里の若い者を総動員させて探しに来た。阿求の母としてでな

く、人里全体として、動いたんだ。

そんなことがさみしくなんて、ない。ずっと繰り返されてきたことで、今更の断絶をくよくよするほど子供じやないんだ。自分に言い聞かせる。

腰に酒ひょうたんを付けてきた若い衆の戯れ言がなんだか遠いような気がした。文も母様も静かで、今夜は男達ばかりが煩い。森を歩む足音がまばらに聞こえて、夏だというのに薄ら寒い気持ちになる。

後ろから見た見た母様のうなじは凜と澄んだように白い。控えめに結い上げた髪はほつれ毛の一つもないように見える。松明に照らされてかすかに光を返すその白い相貌を出来るだけ見たくなくて、私は眠ったふりをして、文の羽根の中に顔を埋めた。ぎゅうと抱きついた背中が柔らかくて、優しく、なんだかそれだけで泣きそうになって、ちよつと困った。

「阿求？」

「ううん、何でもないので」

いぶかしげな文にそう答えた。

大勢でいるのに二人きりのような、そんな気がした。

無事人里に着いて、自分の部屋に着いてもなお、その沈んだ気持ちは治らなかつた。それぞ

れ別々に湯浴みをして、しきのべられた二組の布団に潜り込む。灯火を小さくする。何から話せばいいのか。うまく口が動かなくなる。淡い闇の中で寝返りを打つ。薄眼をあけると文の小さな丸い頭が見える。

「……ごめんなさい」

ひとまずは巻き込んでしまったことを詫びる。

文もごそごそと寝返りを打つ。こちらを見る瞳は澄んでいる。

「いいですよ。ちよつとぐらいなら人間の生活も興味深いですし、新聞のネタになるかもしれない」

彼女はそう言つて笑つた。その言葉の端には、長居はしないのだとありありと現れていた。

ちりちりと芯の焦げる音がして、ふつと明かりが消える。油が切れたのだろう。

目が慣れるまで、じつと待った。夏のじつとりと汗ばむような湿気の中で、夜闇はどこまでも濃い。その中で浮かび上がるように彼女の肌ばかりが白く見える。離れたくなくて、手を伸ばそうとして、それでもまだ怖くて、布団の中に押し込める。

指先ですがりつく代わりに、口先で訊いた。

「怒つてる？」

「どうして？」

「勝手に……ペット扱いたから」

「ああ、そのこと。別にそれぐらいで怒ったりはしません。あの場を誤魔化すための方便だったのでしょうか？ それなら仕方のないことです」

何でもないことみたいに、笑って言った。その声に胸がきゅんと切なくなる。

文は分かっているんだろうか。

どれだけ私が一緒に居たかということ。

きつと分かかってないんだ。初めて出来た友達のこと、どれだけ私が恋しかったかなんて想像もつかないんだ。そう考えるとますますさみしくて、自分ばかりが空回りしているような気持ちになつて、哀しくなつた。胸の奥からじわじわ熱いものが込み上げてきて、口元が歪む。泣いちやダメだつて思えば思うほど顔がくしゃくしゃになつて我慢できない。

「っ……」

唇を噛んだ。だめだ、だめだ。泣くこと厳禁。こんなの、ただのわがままな子供じゃないか。寂しいから一緒に居て欲しいから、無理矢理にでも腕にすがつて、自分のものにしたくつて、それにあまりいい返事をもらえなかつたからつて、気持ちが落ち込んでしまうなんて、本当にただの人間の子供みたいじゃないか。

稗田の家のものはもつと立派で、物を書く者はもつと立派でなくちゃいけない。母様のよう

に、凜として冷徹で黒々と冴え冴えと、ただ事実と言葉を折り重ねるようにして、墨と紙だけで生き延びるような、そんな存在でなければならぬのに。

「あ、阿求……？」

涙でぼやけた景色の向こうで心配そうな顔をしているのが分かる。

まぶたの上、ごしごし擦る。指先のぬめる感覚に、思っていたより本格的に泣いているんだと気づいて、焦る。

「ち、違うんです、その、なんでもなくって、ゴミとか、入っ……」

全部言い切るより前にそっと抱き寄せられる。布団の上からぼんぼんと優しく叩かれる。

「いいから、寝ましょ？」

文は泣いている私を見ても、それしか言わなかった。あやすようにして、肩の上をなでる。その手が優しく、胸の奥がますますぎゅつとなつて涙があとからあとからあふれてくる。

「こっち、来ます？」

そう言つて自分の側の布団をはだけさせてくれた。なんとなく申し訳なくつておずおずしていると、強引に腕を引かれた。

「暑いけど、さみしいよりいいでしょう」

「んっ、」

ただうなずくだけで精一杯だった。すつぽりと腕の中に収まってしまうと、思い切り泣くことが出来る。身体を震わせるようにして、涙を出し切るようにした。息が苦しくなりそうなくらいに、ぎゅうぎゅうと顔を押つけて、じわじわとしみ通っていく涙の熱さを頬で感じた。こんな風に誰かに甘えるのは初めてだから、こんなことって二度と無いような気がして、もつたいなくつていつまでもこうしていらればいいのにつて、そんな気持ちになった。

「妖怪はね、寂しいつてことをよく知ってるんです。だからそう言うときはどうすればいいのかもよく分かる。事情をこれ以上悪くはしないで、ただやり過ぎするための身構えの仕方について、私たちほどよく知っている動物はいない」

髪を優しく梳いてくれる。その言葉は軽やかに優しく流れていく。まるで子守歌みたいだと思つた。

「人肌の暖かさやぬくもりや、心地よさに勝る良薬はありません。こういう時にはね、誰もがいつまでもおしりに卵の殻をひつつけたままでいるんだつて、思い出すんです。そしてそれを見んなで許し合うんです。他人の問題に首を突っ込んだところでただ飲み込まれるだけですから」

どこまでも優しく柔らかく安らかに包み込む腕の中で、ひくひくと震えていた泣くための筋肉がやすらいでいく。

「かわいいかわいい阿求。おやすみなさい」

それきり、文は何も言わなかった。身体を包み込むぬくもりだけがそこにあつた。

半袖からのぞく、しつとりと張り付くような腕の内側の肌へ触れる。指先だけでは足りなくて、もつとよく知りたくて唇を寄せた。柔らかなその感触が心地よくて、いつまでも触れていたいように思った。

翌朝。

「今日は何するんです?」

「えつとね、とりあえず文の散歩かなあ」

「……訂正します。私『と』散歩です」

「むうー、ペットはしゃべつたらいけないんですよ」

「ええー、そんなのズルいですよ。ペットにだつて言論の自由とか黙秘権とかあるんですっ!」

そんな馬鹿なことを言つてきやらきやら笑いながら、朝ご飯を二人で食べる。二膳を真向かに突き合わせて置かれるのはちよつと落ち着かないから、隣り合わせにしてみらつた。二人で縁側のほうを向いて、今日の予定だとか、天気の話だとか、そんなとりとめもない話をして、朝ご飯を食べるといつもよりずつとずつと美味しい。

「卵焼きもーらいっ！」

「ああー、文つてばずるいつ、それならきんぴら取っちゃえっ」

「むうー、じゃあ里芋っ」

そんなことをやっている、細く開いた障子の隙間からそつと短冊が差し出された。何か書かれている。

『朝食後、二人で速やかに私の部屋まで来るように。なお、ペットと食事を共にすることは構わないが、くれぐれも食べ物で遊ばぬように』

「はーい」

横からのぞき込んでいた文はそう言つて笑つて自分の箸をおいた。いつの間にか飯茶碗が空になつていた。

私はそれどころでなくて、ぎゅつとその手紙を握りつぶした。何をどう考えればよいのか分からなかつた。母様が何を言われているのか、何を言うのだろうかと考えていると箸が動かなくなつた。見張られていることも嫌だつた。自分の家だから、氣遣われているのは当然のことなんだけど、それでもこんな風に一挙一同を注視されているのは氣持が悪い。

「薩摩芋もーらいっ」

はつと顔を上げると、文が笑つていた。指先に挟まれているのは揚げ芋の糖蜜がけ。ぱくつ

と一口で食べて、ペロペロ指先をなめる。

行儀は悪い。躩けられていない自由な野生の天狗。それが文だ。

「はやく済ませて遊びに行きましょう。夏を楽しまなくちゃ」

何にもとらわれずに快活に言った。

母様の部屋に呼ばれた通り、二人でちよこんと正座する。

「一緒に寝ていたそうですね」

母様に開口一番、そう言われて、私は顔が熱くなって口が動かなくなるのを感じた。

恥ずべきことは何もない。けれど文に赤ん坊のように甘えていたのが、母様にまで筒抜けになつているのは頭の中を熱く煮えたぎらせる。

「それの何がいけないのですか」

文はかけらも動揺することなく答えを返した。

母様は目を細めて文を見る。本を読むときとまったく同じ顔つきで、私は背筋がぞつとするのを感じた。

「子供が、ペットを抱いて寝ることの、何がいけないのですか」

畳みかける文から、母様は視線をそらした。

「……それだけではありません」

押さえ込む声で、母様は言った。音も立てぬほどの緩やかさで、文机の引き出しを開ける。差し出されたものを見て、叫び声を上げないのが精一杯だった。

「それ、は、」

「阿求の部屋から出てきたものです。身に覚えが？」

母様はやはり文をねめつける。私のことなどは見ていない。

違う、それは、違う。

文には関係ない。

その本は、私が、必要で。

声が出ない。言葉が出ない。母様の剣幕を恐れて、口を差し挟むのをためらってしまふ。

「このような、汚らわしい春画の入った草紙を、阿求の部屋に届けたのは何故ですか」

母様は徹底的な証拠を突きつけるように低い声で問うた。

春画と聞いて、身のうちが凍る。借りた草紙のうち、自分が読んだのは音飛ばしの呪法が書かれていた頁だけだ。遠くにいる妖怪を誘う時のおまじないとして紹介されていた。そのページから先の『辻売りにおける値段交渉の仕方』、『場所選び』、『服の脱がせ方』、『避妊具を付けるタイミング』などは正直意味も分からなかったし、なんだか気味が悪かったからきちんと読

んではない。

他の特集記事はその頁を探す時にただばらばらとはぐつただけ。ちらちらと見え隠れしていたページを私は一生懸命それらを見るまいとして避けていた。

でもその一方で、ちらりと偶然かいま見えたものをありありと思い出すことが出来る能力を持ち合わせてはいる。見たものをけして忘れない程度の能力。たとえ一瞬であろうとも写真に撮ったように思い出すことが出来る。

嫌悪感で口元を引きつらせながら、それを思い返してみる。そのほとんどを占めているのは裸の男女が絡み合う図。脳裏に描くだけで吐き気がして、私は思わず口元を押しえた。その図画の意味は分からないのに、ひどく愚かしく不潔な行為にさえ感じてしまう。

「へえ、ちよつと失礼」

平然とした様子で文は母様の手から書を奪う。はらはらと目を通す。

「なんだ、春画というからどれだけえげつないかと思えば普通に正常位じゃないですか」

ほとんど失望したかのような口ぶりで、文は言った。

「な……っ」

母様の顔から血の気が引いた。

「ちよつとレズっぽいのもあるみたいですけど、別にイマドキそれぐらい普通ですって。一昔

前のセックスのハウツー本見ただけで何をそんなに騒ぐ必要があるっていうんです？ 筆おろしをデリヘルに頼むあたりだつて、ただの陳腐なエロ本じゃないですか」

「やれやれ、とでも付きそうだった。あられもない言葉に、母様の顔がますます蒼白になる。「っ、あなたは、どうしてそんなことが平然と……」

「ところで話はそれだけですか。どうして人間つてこんなにつまらないことで大騒ぎ出来るんでしょうね。ずいぶんと暇な人種なんですネ、寿命も短く、いくせに」

文の皮肉は母様に向けられたはずなのに、なぜだか私の心までぎっくりと刺していた。じわり血がにじむように苦しくなつて、思わず胸を押さえた。

文は、気づかない。義憤に駆られて、立ち上がる。

「行きましょう、阿求。ホントの夏つてのはね、もつと楽しいことが待っているんです。こんなところで退屈で低俗なババアに絡まれてる暇は無いです」

「……っ、え……」

文に手を引かれる。困る。まだ心がついて行けていない。それに母様にそんな言い方、ひどい。でも、どうして、そんなこと。頭の中、困惑が渦を巻いて、でも言葉にならなくて気持ち悪い。怖い。嫌だ。困る。

「あ、やつ、ちよつと……」

力が強くて、抵抗出来ない。ずるずると引つ張られる。よろけながらも立ち上がった。

「待ちなさい。まだ話は……」

母様の手が文の持つている本に届く。引つ張り合いになる。

「ええい、めんどくさい。飛びます。今日は昼も晩もご飯要りませんから。じゃっ！」

狭い室内で羽を広げる。風圧で母様の髪が乱れる。それでも手は離れない。

ひととき大きく羽ばたく。文の片手に腰を抱かれる。その力強さによりよけて身を預けてしまう。みり、と嫌な音がして、本が半分がちぎれる。黒い羽根が舞い散って視界を隠す。

「あ、」

はらりと母様の手から紙片が落ちる。刹那に羽ばたきにかき消されて吹き飛ぶ。舞い散る紙吹雪の中に鴉の濡れ羽が一筋だけ躍る。紙の上の筆のように。

それが最後に網膜に張り付いた像^{イメージ}。

障子ごと突き破って、一瞬にして室外へ。加速度も風圧も感じる暇すらない。その猛スピードと衝撃に、私は気を失っていた。

気絶している間に夢を見た。

誰かが私のことを呼んでいるのに、答えられない。

あや、あや、戻っておいで。おうちにもどつておいで。ここはすてきだよ、安全な場所だ。誰にも傷つけられない、お前だけのおうちだよ。

遠い誰かは甘やかすような猫撫で声で私をあや、と呼んだ。それは遠い前世の記憶。私が『阿弥』だったころのこと。

かつて私たちは同じ名前の生き物だった。

書くために生まれて、そして、書き終わった方が死んだ。

それでもまだ、終わらない旅路の果て、私がいる。

川の流れる水音で目が覚めた。

「あ、起きた」

平気な顔をして、文がこちらをのぞき込んでいた。真上からのぞき込まれているということ
は、いわゆる膝枕をされていたということだった。気恥ずかしいと思うほどの暇もない。

「人間は弱いから心配しましたよ。ずっと目覚めないんじゃないかって」

そんなことをあつけらかんと言つて、けらけらと笑う。その無邪気さにひどく胸の中がかき
乱される。

ゆつくりと起き上がる。まだ頭の隅がずきずきと傷む。高スピードの衝撃波の影響が耳の奥

にまだ残っているような気がした。

どうやら川原のようだった。敷物もないままでごつごつした石の上に寝かされていたのだった。木陰で、ちらちらと光が瞬いている。空気は涼しいというよりはどちらかというとも肌寒いぐらいだった。

息をつく。気を失うより前に起こったことを思い出す。

——寿命も短いくせに。

——人間は弱い。

正座のまま手で手をゆるゆると掲げる。そしてそのままのゆっくりとした動作で文の頬を打った。ぺちんと実に情けない音がした。

文の言うことは正しい。

確かに、それぐらいの力しか私にはないのだ。

「恥を知りなさい」

私は母様がそうするだろうという冷徹な言い方で、文に言葉をぶつけた。

「他人の親をあんな風に罵倒するのが本当に正義だと思っっているのですか」

声は平静を保っているのに、頭の中は真空のようにきりきり締め付けられているようだ。身体と心が別々になったような気持ちになる。

これが本当の母様だったろうか。思うことがそのままでは言葉にならずに、泣きたいときも上手く泣けずに。声はあくまで冷静を保ち、凍てついた理性のままに正論を紡ぎ。

このようなときに、私は確かに母様の子として育てられたことを自覚する。元来なら怒るべきで叫ぶべきで駄々をこねるべきなのだ。子供であるならそのようにするべきなのに、そのようには振る舞えない。

「なんですか、それ」

文は打たれた頬を抑えたままで言った。うつむいて前髪に隠れている。

「私は、貴女のことを心配して……」

「そういうのを余計なお世話と言うのです。家族のことは家族に任せておいてください」

このような言い方では、誰もついてこない。それは知っている。私が母様を恐れるばかりで、ついていくことに絶望したように、正論は人を脅かすばかりなのだ。

文がまつすぐな目でこちらを見る。その目はひどく深く、紫水晶の結晶面のように鋭利だった。「……都合の良いときにはペットだと言って甘やかして、事情が変われば部外者だと言って、私を置いていく」

その声の奥から、苛立ちが噴き出す。きつと色を付けるならそれは赤色。動脈血のような鮮烈な紅。

「本当に貴女は阿弥の頃から変わっていないんですね！」

* * * * *

「ねえ、阿弥」

縁側に腰掛けた文がぼつりと言ったのを、病床、聞くともしに聞いていた。外は眩しくて眼を開けることすら辛かった。返事をしようとして咳き込んでしまった。夏の空気は暑いはずなのに、ひどく寒気がして止まらなかつた。このところはずっとそうだった。ついこの間までは高熱で茹だるようだったのに。

「こんなところ、逃げましょう」

人の里はいつでも世知辛い。そのことを文は憂いていた。

思い返せば確かにそれも夏のことだった。私たちは既に出会っていた。そして恋をしていた。その先にある結果を予想するのは簡単なことだった。幻想郷とて種族、寿命の差を超えた同性同士の恋愛など上手くいくはずはない。

死ぬ者は死ぬ。生きる者は生きる。

単にそれだけの話。

私たちは初めからどこか何かを壊されていて、それが見えないふりをしていた。出会ったことの意味なんてあつて無いようなものだった。

でも多分、文にとつてはそうでなかったのだろう。

どうか、意味を探そうとしていたのだろう。意味はこれから生きていく者の為に必要なものだから。

「私なら貴女を守つて、どこまでも飛んでいけます。こんなに窮屈なところじゃなくて、どこか、自由にいられる場所を見つけましょうよ。天狗の山でもいいし、それとも……」

なおも言いつのる文を遮るようにして、私は言った。

「ごめんなさい」

最初に口にしたのは、はつきりとした拒絶だった。

「文でも『こんなところ』なんて言つて欲しくない」

眼を閉じていても、文がきつと泣きそうな顔をしているのが解る。それぐらいには一緒にいる。どんなことを言えば笑つて、どんなことを言えば泣くのか、手に取るように解る。

言葉というのは、そのようにして使うものだ。人に伝え、人を操り、幻想郷の均衡を保つ。

「あと、どれくらい一緒にいられるか分からないけれど」
嘘だった。

終わりはもう、はっきり見えていた。

私の命の残りの半分、折り返しはとうに過ぎていた。後はただ、過ぎてきた道を越していくばかりで、それも坂を転げるようにして終点へ加速していく。

最初から、決まっていた。

それは十二の春に帳面を渡された時から、決まっていたことなのだ。

半生。文字通りの意味での。

人としての人生を全うするためではなくて、書くためだけに、私は生まれたのだ。今はもう縁起を書き終わり、転生の準備が済めば後は身体ごと朽ちていくだけだ。

そう、そのはずだった。

文に出会わなければ。

「ここは、私が私になつた場所だもの」

私の心はいつでも人里にあった。ひとのために生きるものだった。御阿礼の子であるならばそれは自然のことであつた。そのようにして、この八代を生きてきた。人を守るための幻想郷縁起を書く人間が人里を見放すことは出来ない。今もこの家のどこかでは稗田の者達が人里全員に頒布出来るだけの写本を作るべく、一心不乱に筆を走らせているところだ。その期待を裏切るわけにはいかない。

書くために生まれた人間が、妖怪に心惹かれるなど、あつてはならぬことではあつたのだ。

「文、髪を切つて頂戴」

それでも今更止める気など、ない。その程度には愛してしまつた。

「いいんですか？」

「あなたに切つて欲しいのよ」

懐剣を渡す。躊躇はなかつたけれど、その金属の重さに手が震えた。

きつと、そのまま突き刺してもらえれば楽になれるだろうにと、一瞬だけ思う。文の手がそのようなには動かないことを知つていて、それでも妄念のように思う。

伸ばした髪を束ねて、一気に引き切つた。じぶじぶと嫌な音がする。切り口がきつと不揃いなのが見なくても解る。床の上にとらえきれなかつた毛束が散つた。

そうして落ちた髪の束を一房、懐紙に包む。

包みの結び目に書き記すべき言葉を考える。言葉を使うものとして何も書かずに渡すのはどうにも侘びしくて、何か一言でも書ければと思つたが、私だけの言葉というのはもう尽きてしまつていて、手がただ筆を持つて震えるだけだつた。結局一文字も書けないまま、筆を取り落とす。

うつむいて、唇をそつと押し当てた。紅がうつすらと残つた。病人の、顔色の悪いのを気取

られぬように、おもいびとの来る日はひそかに備えていたものだった。言葉には直せない思いを現すには、もうそのような方法しかなかった。

「形見に」

「……受け取れないですよ」

だって受け取ったら、死ぬことを受け入れてしまうような気がして。

「いいから。証だから」

有無を言わずに置いた。

否、それ以上手を支えているのが辛かったのだ。

「眠ったら、この役に立たない身体が無くなっていたらいいのに」

「そんな、かなしいことを言わないでください」

「かなしくは無いわ」

心だけ、あなたの傍に居られればそれでいいもの。

腕を絡めて、頬をすり寄せる。互いの身体を確かめ合う。指と指が絡む。体温が肌と肌で交換されて、同じ温度になっていく。

同じ名前、同じ性、同じ温度。

本当に、まるつきり同じ生き物になれたらいいのに。

「あいしてる、あいしてる、あや、あなたがすき、あいしてる」

うわごとのように泣きながら二人で眠った。それはもうどちらが先なのか解らなかった。その程度には、私たちは同じ生き物であったのだ。

そして私はもう、目覚めることはなかった。

そのままこんこんと眠り続け、私、阿弥は阿弥であることをやめた。

魂は既に転生の準備を済ませていた。後はもう、身体が朽ち果てるのを待つばかりであったのだ。

* * * * *

圧倒的な記憶の遡及を経た後に、こみ上げてくる悪心。

「つ、ぐ……」

口元を押さえても、腹の底からわき出してくるものを止められない。立ち上がる暇もなく、迷惑にならぬよう顔を後ろへ背けるのが精一杯だった。地面から跳ね返った吐瀉物が頬を叩く。胃の中のものを全てはき出してしまっても、喉奥からぐるぐると叫き散らすように異物感が

暴れている。酸い胃液を吐き出した後の苦い消化液が搾られるようにして唇から垂れる。

もつと何かはき出したいのに口の中はひどく乾いていて、出せるのはせいぜい空気だけだ。河原にしゃがみ込んで、眼を閉じる。自分を落ち着かせるためにゆっくりと数をかぞえた。

「阿求、ごめんなさい、阿求……」

背中をさす誰かの声がある。それが誰なのかも解らない。ただ自分の中で暴れ回る何かと戦うだけで精一杯だった。

空咳を何度してもそれは出て行かない。喉の奥で突つ張つたままの何かがじくじくと神経を灼く。眼底で光がちらつく。眼の奥が断続的に、何か突き刺したように痛む。

思い出は良いものばかりとは限らない。あるいは美しくとも、圧倒的な物量で私を打ちのめす。阿弥の一生分の記憶。一呼吸を数百枚の画像にまで分割できる高精度の時間分解能。思い出の像が脳髓を埋め尽くす。

肩で息をする。それでも毒の空気を吸っているみたいだ。きちんと生きている気がしない。存在していること自体が、間違っていたようなそんな感覚にとられる。自分は死んでいる方が正しいのじゃないか。生きていることが不自然なのじゃないか。悲嘆でも卑下でもなく、実感としてそう思う。

生きて起きて陸の上で生活することは苦しい。身体の重みに耐えられずに横たわり、朽ち果

てていくことの方が合理的に思える。死の淵が誘うのではない。自ら飛び込んで落ちていくべきだと考える。

死をなぞるといふのは、こういうことだ。

ぎゅうと抱きしめられて息が止まる。自分の呼吸音が止まって、外部からの音が鼓膜を震わすのがようやくよく認識される。

「阿求、阿求、お願いです、阿求……」

私の名前が呼ばれる。

そうだ、私の名前。

私は、もう、阿弥ではないんだ。

「つ……あ」

息を、吸う。喉がつかえる。それでも呼気は出ていく。喉奥に突っかかったままで、それでも呼吸がゆつくりと繰り返される。

「あ、や……」

名前を呼ぶ。自分ではない。その名前はもう、私のものではないことを強く自分に言い聞かせる。

「ああ、よかった、阿求。生き返って！ 人間は本当にすぐ死ぬから……」

死。その言葉の含む像イメジに引き摺られる。

像を胃液ごと嘔吐した。胃が痙攣をして中で何か六本足の動物が蠢いている幻触覚を追い出そうとしていた。

「ああ、阿求、阿求だめ、だめです……」
強く強く抱きしめられる。

「阿求阿求、お願い私の阿求、生きて、生きてください、お願い、お願いです阿求……」
痛いほどに切実な声。耳元に響く切迫感にようやく意識を取り戻す。息を吸って、吐く。呼吸の仕方を思い出す。

日が陰っている。遠くで日暮の鳴き始めるのが聞こえる。川の流れる音もまた遠い。頭がぼうつとして、そんなことをまるでただの風景みたいに感じてた。

さつきまで頭の中で煩いほどに鳴っていた阿弥の思い出が強く頭の中に作用していて、まだうまく物事を考えられない。今ここに自分がいること自体、ふわふわして現実味が無い。

でも、一つだけ分かることがある。阿弥も最後までそれを望んだし、私も魂の奥底に刻まれ

ているそれを否定することは出来ない。

「……帰らなくちゃ」

ぽつりと言葉が唇から落ちた。

顔を上げた文は少しだけ泣きそうな表情をしていた。それからすぐに後ろを向いて、その表情を隠した。

ずるいな、と定まっていないう頭で思った。いつでもそんな風に隠されてしまっていたような気がして、でもそれは多分私の記憶ではないような気がした。

「……ええ、そうですね」

その声は、どう聞いたってただの空元気だったのに、言葉尻を捉えることさえ許せないぐらいに、大人の返事だった。

背に負ぶさって、飛翔する。二人で終始無言だった。以前に乗ったときのような高揚感も無かった。悪心は軽減されていたものの、いくらかまだ残っていたし、浮遊感は以前のように心を和らげてはくれなかった。

人里の生け垣で降りして貰った。文は小さくうなずいてこちらを見た。僅かに唇が動いたような気がして、でもそれ以上何もなかった。すぐにかき消えるようにして飛び去ってしまった。

何かの名残などというものは無かった。

夕暮れは驚くほど素早く人里のそこかしこに忍び寄っていた。一人きりで里を歩いていると、少しずつ建物の影が濃く長くなつて自分の上に覆い被さつてきているのを感じた。

遠くで子供が笑っている声が聞こえた。本来なら級友と言つていいぐらいの年頃なのだろう。自分は寺子屋にはほとんど行かないからそんな概念はないけれど。

取り留めもなく、自分がもしも普通の子供だったらということを考えていた。普通の家庭に育ち、普通の母様に撫でられたり叱られたりしていたら、というような、詮方ないようなことを。坂道を上つて不意に見上げれば、門前で母様が待っていた。逃げ帰りがたかったが、帰るところと言え、私にはもうここしかなかった。

「阿求」

呼びかけられたその声は、掠れていた。

「どこへ行つていたの」

冷たい声だった。うつむいていて、表情は暗く翳っている。どこまでも甘えさせてくれないひとなのだと感じた。

「……山と、それから川とを見てきました」

私は、平坦な声で答えた。自分の声を聞いて、何か読み上げているようだ他人事のように

思った。そうやって平然としたそぶりをして色々なことをやり過ごそうとするのもまた母様に似ていた。嫌なところばかり似るものだと取り留めもなく思う。

母様の手が挙げられるのを、暮れかけた夕暮れの中、残像のように見ていた。高い音を立てて、頬は叩かれた。その痛さよりも、母様の赤く泣き腫らした目ばかり覚えていた。

「私が、どれだけッ……」

その先の言葉は無かった。

ただ、崩れ落ちるように抱きしめられた。母様の腕は強く、痛いほどだった。私はそれに足らないほどの弱さで、抱擁を返した。

ごめんなさい、かあさま、ごめんなさい。

胸の内で小さくつぶやいて、言葉にならないまま、私たちは静かに抱き合っていた。

翌日から自室に一人こもる。空気は暑くよどんでいる。風も吹かない昼下がりに。何も書く気はしない。帳面を広げることすら出来なかった。頭の隅がまだ微かに痛んだ。微熱がありそうな気がする。

書くべきこと、書かなければならないこと、書けること、書こうとしていたこと。

全て喪失してしまったような気がする。それだのに眠る気はしない。身体が何かを書きたが

っているのに、心がそれについていけない。

今更、私に何を書けるといふのだろう。阿弥が書いたように、あるいはもつと前の御阿礼の子達を書いたような硬く重い縁起を書けるとも思えなかつた。

自分の理想はもつと軽く鮮やかに幻想郷の今を切り取つたものだ。そう、言つてみれば文の書く新聞のような。

けれど自分の力がそれに適正かどうか、私には分からない。どうやって何を書けばあのようなになるのか。一度書いてみる必要があるのは分かつている。それこそ文になつたつもりで。けれど文のことを考えれば考えるほど、書くために必要な何かがゆるゆると出ていくのが分かる。身体が浮き立つて心が浮ついて、何をどうすればいいのかわからない。

ただ胸の中でとくとくと心臓がざわめくばかりで、でもそれは書く力には結びつかない。気づけばただ文のことばかり考えてる自分がいた。今頃どうしているだろう。にとりと一緒に何か楽しいことをしているだろうか。少しは私のことなども考えてはくれないだろうか、などという、愚にも付かないようなことを考えてしまう。

文机に頬杖をついて、息をつく。指先に怪我があるわけではないのに、動かすのすら怠かつた。死ぬ間際の阿弥の身体感覚がまだ残っているのかもしれない。

がさり、と音がした。

「この家は客人にお茶も出さんねい。流石、偉いところの人は違うの」

中庭に、白い影。小山のようにこんもりとそびえている。ぶよぶよとした肉の塊が、そこに居た。一瞬その白さに陽炎のようにも見えたが、その圧倒的な質感は幻ではない。現実そのものの重みでその男はそびえていた。氷の溶けて水になるような勢いで額から汗が流れ出て、見た目だけで臭うような不潔感が出ていた。

「……貸本屋が何故こんなところに。ひとを呼びますよ」

驚きをひた隠しにしつつ、私は尋ねる。背中に冷や汗をかいているのが解る。

中庭の生け垣が破れたままなのは私の失態だ。自分がいつでも抜け出せるようにと、わざと家人へ告げなかったばかりか、誰にも気づかれないように適当な折れ枝で塞いでおいた。このような賊に入り込まれることなど考えもしなかった自分を呪う。

貸本屋はちろりと舌先を蠢かす。やはり太った中年の男とは思えぬほどにてらてらと紅く色めいて、気味が悪かった。

「お嬢ちゃんこそ、他のものに儂と会うてるとこ、見られたくないのと違うき？」

「何を……っ！」

「私はただ、借りたもんを取りにきただけ。ぶひゅひゅ」

扇子で口元を隠す。身じろぎしたせいで、滝のような汗が貸本屋のこめかみからしたたり落

ちて、肩口のあたりに醜い染みをつくる。

「あれ、は」

脳裏に蘇る。散つていった紙片。母様と文の手で引き裂かれた草紙。今はもうない。母様に聞いたところでできつと汚らわしいものとして処分されてしまっているだろう。

「返しようない、かね。せいとも失くしたかね。ぶふ、ほいだら弁償よ、どちらにしても。それが人の世よ。憂いねい、辛いねい。世知辛いねい」

男は嗤う。憐憫ではなくて明らかに嘲りが込められている。しかしそれに抗うことは出来ない。なくしたものはもう、戻らない。

「何をすれば」

「お嬢ちゃんには知られとうないね、おお、知られとないに決まつとお、うぶぶぶ」
吐き出した息が全て濁つて聞こえる。その針のように細い眼光の向こうはうかがい知れないほどに深い。

「出来ることをやるしか無いねえ。金を稼ぐにはねえ、人の役に立たなくっちゃいけない」

「……私には、何も」

「ぶほ、ほうッ。何を言わつしやるね、御阿礼の子。書かねば存在価値など」

ぶぐぶぐと鼻を鳴らす。ひどく不快な音だった。

「書かねばなるまいて。書くために生まれたのなら」

何故、そのことを知っている。己の本分を見抜かれている。そのことの嫌悪感が、脂ぎった視線の形になつてべつとりと肌に張り付くような気がした。

だがその一方で心の中の何かが、ごとりと音を立てて傾いたのが分かった。重い石が坂道を転がるように徐々に動き始めて止まらなくなる。

私には書くことが、読まれることが運命付けられている。それなのに縁起を書くことは未だ許されぬ。書くことが私の本能であるのに。

それならば――

――縁起でないならば、許されるのか。

低俗で下らないただの読み物として、稗田の名の下にはなく、ただ無名の民草の作として書かれるべき文章であれば。

野山に花の咲く如く、ただ浮かんだままに書かれた文章であれば。

野山の花は誰かのために咲く訳ではない。自然じねんの理のままに生まれて死んでいくだけ。それが見られようと見られまいと褒められようと貶されようと、ただひたすらに己を咲き誇るばかりだ。

ただ書きたいから書くのだと、文は言っていた。同じように、書きたいことを書きたいよう

に書くことが出来る場が、私の本当に求めているもの。

「本を書いて、それが売れば、金が手に入る」

舌なめずりをするその唇がてらてらと紅い。脂ぎった肌のつやが否応増したように見えた。悪魔の口先も恐らくはこれほどに禍々しくはあるまい。

「金は力。力は自由」

その言葉はひどく胸の内をざわつかせる。蜂蜜のようにどろりとして甘く、胸焼けさせる。力も自由も今の私にはない。だが、それは私が書きたい物をいつか書くためには確実に必要なものだ。

「実にくだらないが、なべてこの世はくだらないもので出来とおね」

ゆつくゆつくとしゃつくりのような声を立てて、貸本屋は嗤った。

「何もかもを吐き出してまい。鵜がひとたび人に飼われるならば、けして飲み込むなと育てられた筈」

下げた風呂敷包みから丁寧に取り出され、縁側に一つ一つ置かれる。薄緑の柵目に区切られた原稿用紙の束。黒漆と彫金と螺鈿細工で縁取られた万年筆。禍々しく黒光りする洋インキの壺。忌まわしい売文家の道具だ。母様にそう教え込まれているものが目の前に積まれていた。

正しいことをするのなら、はねのけて然るべきだった。このように呪われた物品など唾棄さ

れ投げ捨てられて良いはずだった。

そうせずにただ置かれるに任せたことこそ、私の敗北の、受諾の、罪惡の徴であった。

「さあ、お嬢ちゃん」

——悪いことを、しようか。

その顔は真横から差す夕日に照らされ、醜い皺でふんだんに彩られて、実に歪で楽しげだった。

とはいえ、最初の三日は何を書けば良いのか解らなかつた。ただ硬筆をいたずらに原稿用紙の上に滑らせてその感触に慣れ親しむばかりで精一杯だった。平素用いている半紙と筆とは勝手が違う。ペン先の引つかかるような感触が無くなるまで、いろはを書き続けた。筆と手と心が一体にならなければ本当の文章というものは紡がれない。であるならば子供の手習いのようにしてでも、道具になれておく必要はある。

何を書けばあの卑しい貸本屋が満足するのかについては思いつかない。本当ならあの男のことを考えるのも嫌だった。借りていた本の一ページを思い起こす。写真のように焼き付いた画像ごと想起する。

肌色のほとんど褪せた色草紙。紙面に向かってこちらへ頭を向けて女の妖怪が仰向けに寝ている。肌は露わになり、読み手側に媚びを売るように喜色を浮かべている。膝を立てて大きく

開いた肉付き良い足の間に男の姿がある。男の首より上は紙面から見切れていて顔が解らないようになつてゐる。ただ見苦しいほどに局部が強調されてゐた。

年端のいかない私でも、これがどのような場面であるのかは解る。それでも生理的な嫌悪感が止められず、頭の中から画像を消す。

貸本屋の言い置いた言葉を思い起こす。

——好きなものを書きんしゃれ。女でも男でも、人でもあやかしても良い。

——ただし、ぬるいものを書いたら金にはならんで恥になる。

その言葉の裏を考えずにはいられない。恥をかかせる、という意味だと考えると鳥肌が立った。この絵のようなものを、文章で書かなければならない。自分の言葉で、書き表さなければならぬ。魂を切り売りするようにして、書き付けなければならぬ。

御阿礼の子として、そのようなものを書くことは許されぬはずだった。稗田の家の者がそのような屈辱を嘗めることが許されるはずがなかった。たとい無銘の書として世に出るとしても、己の矜持が許さない。

けれど、一度承諾したからには書かなければならない。

そうでなければ、あの嫌らしい貸本屋にどのような噂を立てられるのか解らない。そうすれば母様に迷惑がかかる。それだけはしてはいけない。

私の恥ならばまだ良い。

母様に恥をかかせるわけには。

四日目の朝。

目覚めた瞬間に、一つの靈感が降りてきた。ぞくりと肌を粟立たせ、背筋を震わせるほどの強烈な感覚。その方法論を用いれば、少なくとも何か書けるだろうことは間違いない。

正直に言えば正しい方法論とはあまり思えなかった。正道から外れた邪道を使つても何か書きたいかと言われればごく僅かな逡巡が生まれる。だがそれをしなければおそらく一文字も書けないままで終わるだろう。それだけは避けねばならない。

母様のために。いや、書くと決めた己のために。

剣を鞘に収めるように、ぱちりと万年筆の蓋を閉める。次に抜くのは、書くことが定まつてからだ。

書くことをおびき寄せるには、ひととき、私は私でなくならねばならぬ。手桶と手ぬぐいを手元にたぐり寄せる。口元に手をやって空咳を一つする。苦しいことになるだろう。それでも構わない。一度やったことではあるのだ。

準備は整つた。

心の中に存在する古びて錆び付いたつかえ棒を、片側に思い切り寄せる。古い記憶の扉を

開ける。

阿求の身体では未だ経験したことのない事柄を知るための唯一の方法。前世の記憶へ通じるより他ない。短い一生分の、それでも膨大な二十数年分の記憶が瞬時に迸る。怒濤のような情報の流れ。流されて溺れて呼吸もままならない。喉奥がふさがれて、何かが暴れ回る。溜まった苦い唾液のみ手桶へ吐き出す。

息継ぎするようにして、腹の奥へ意識を沈める。呼吸がようやく出来るようになる。心を旧い思い出の中に埋める。速い瀬のように流れていく無数の画像と音声と感覚の中で、暖かな感触もまたある。それを手繰る。

誰もが一生のうち一度ぐらいは運命の相手に巡り会う。

その相手と結ばれなかったとしたって、気持ちを決意させて熱く生きている一瞬の甘さを味わうことだってあったのだ。

それに関連した像を探す。一連の結びついた記憶を強く強く寄せ集めてかき抱く。数十枚の画像、甘い音声、身体を包む感触のいくつか。それらを包括して、深い記憶の底から引き上げる。そうすることに躊躇いはない。それらは全て私の持つていた物だからだ。思い出は私の中にある。常に丁寧に仕舞われて埃も被らないように保存されている。適切に管理された情報を掬い上げて現存する世界に展開する。それが書くべきことであるならば、そうするだけだ。

目を上げる。

白い原稿用紙の上に、一瞬、幻影の字体が躍つて消えた。それら全て、私の脳裏に記憶されている。

紙を一枚捲る。先刻の続きの文章がまた躍つては消える。これが私の見ている幻であることは分かつている。けれどそれらは意味の通つた一連の文章で、どうやら小説の体を為しているようだった。

一つ息をつく。万年筆の蓋を外す。金色に包まれたペン先が禍々しく光り、すうつと通つた一筋の黒いインキ溝の中に取りありと可能性を秘めて佇んでいる。

確信。書くべきことは手の内にある。後はただ筆を動かすのみだ。

予め飼ひ慣らしておいたペン先の筆致は滑らかで申し分ない。紙に吸い込み切れないインキが右手の横に付着するが、そんなことはどうでも良い。跳ね、走り、うねる筆先のままに言葉が紡がれていく。私の意志などが介在する余地はない。

自動的に言葉は紙の上へ置かれていく。まるで初めからそこにあつたように。何かを作るということではない。物語は初めからそこに在つた。ただ生まれてくるのを待たれていただけに過ぎない。私の手はそれを顕在化するべくひたすらに動くだけだ。

それらは既に、起こつたことだ。

言葉がペンを動かす通りに動く。

愉しい。ただ物語の媒体となることが。

嬉しい。ただ言葉の奴隷となることが。

楽しい。ただ文字の下僕となることが。

語り捨てる挿話の順序などはどうでも良い。

書きつける単語の意味などはどうでも良い。

塗りつける黒墨の形骸などはどうでも良い。

「あや、あや、あや、あいしてる、あや……」

あふれ出た言葉が筆先だけでなくて、唇からも迸る。笑んでいる自分に気づく。頬が痛くなるほどに口角がつり上がっている。

ただただ物語に溺れ、言葉に溺れ、文字の、煙墨の、黒色の、紙の、情報の、海に溺れている。溺死は甘い。甘い恋物語だからか。身を灼くような焦燥が、身を焦がすような恋情が、砂糖の焦げていくように黒く紙面を染め上げていく。

こんなものならいくらでも書ける。この魂を切り売りすれば如何様にも。既に起こった事柄ならば後はもう文字に書き起こすだけだ。何の努力もない。どうということはない。

所詮、この程度のことなのだ。文字を書くということとは。

そこから三日三晩、喰うのも寝るのも惜しんでただ手を動かしていた。笑みを張り付かせ目を血走らせて私はただただ書き続けた。心配した家人が差し入れてくる握り飯には手を付けず、ただ水と梅干しを口にする程度で、後はひたすらに文字列を紙の上に転写していった。

貸本屋から道具を預かってより丁度一週間目の朝、書き上げた原稿をまとめ上げる私の手は、こすれたインキで真っ黒に汚れていた。爪の間まで入念に侵入している油っぽい黒は、石鹼でどれだけ洗っても綺麗には取れなかった。

幼いこの手を汚して得た言葉の塊は、ずっしりと重かった。

こめかみの疼痛を堪えつつ、貸本屋へ向かう。風呂敷包みの中に借りた道具一式と原稿が収まっている。風で飛ばされないか、荷車に轆かれられないか、人に突き飛ばされて川へ落とさないか。寝不足でささくれ立った神経では、そんなことにまで疑心暗鬼になっていた。

久方ぶりに訪れた貸本屋はますますみすぼらしく見えた。店主の性根の卑しいのが透けて見えるからだろう。

出迎えた白山の如き暑苦しい大男はやはり汗みずくであった。暑さも頂点を脱したと思われるが、このような巨体であれば発する熱量も生半ではないのであろう。

「ぼほほ、これはこれはわざわざご足労頂きまして実に幸甚。しかも迅い^{はや}。素晴らしい」
「読んでもいないうちから勝手なことを言わないで下さい」

私は冷たく言うと、風呂敷包みごと番台に置く。脂ぎった手へ直に手渡すのを嫌悪した。

「ぶふ、いやこれは失敬。余程の自信作なんねえ。早速拜見。いやはや題目から素晴らしいね、引き込まれる。おお、冒頭、良い掴み。これは良い、これは売れる。良い金になる。読者のきやん玉をぐうと掴んで離さんよねい……」

見え透いた世辞も、彼が読み進んでいくうちに少しづつ消えていった。

店内、しんと静まりかえった中で私はひとり店主の読み終わるのを待った。中途、うなり声に似たものは聞こえたが、それすらも最後には聞こえなくなった。ただ紙の捲られる音と、屋外の蟬の声ばかりが埃っぽい店内に響くだけだった。

そして、最後のページが終わる。

読了してしばらく、貸本屋はぐったりと目を瞑っていた。もとから開いているのかどうなのか分からないほどの糸目ではあるが、時々周辺をひくつかせるからかろうじて閉じているのだと分かる。

そして思い出したようにこちらを見る。やはり無言であった。糸目の奥、かすかに涙のにじんでいるようにも見えた。

「これを、幾らで買いますか」

やむなく私から訊いた。このままではいつまでも気持ちの悪い中年男と見つめ合っていないなけ

ればならない。

「幾ら、いや、本当に、こんな子供が……何という、」

「弁償の費えには足りませんか」

「いや、いやいやいやいや、その程度では、その程度などでは、このような、こんな、有り得ん、稗田の家とは言え、ド素人が、」

主人の狼狽ぶりに可笑しくなつて、つい愚弄してやりたくなつた。

「ではもう一本書きますか」

「な、なん、だと、」

『この程度では』足りないのでしょうか？

「そ、そのような、意味では。こちらが釣りを払わねばならない程だというに」

ぶるぶると震える手で何枚かの金貨を差し出してきた。受け取る気はなかつたが、無理矢理握らされる。生暖かくて気持ちが悪かつた。

「取つとき。約束通りの力」

「……嫌です」

わざと金貨を地面に叩き付ける。硬質な金属音。

「大人を馬鹿にするんも、いい加減にしい」

鈍く重く地を這うように響く。その大きく分厚い手の平に手首ごと掴まれていた。万力で締め付けられたような強い腕力に恐怖する。声さえ出せない。

ゆっくりと重い体躯が動く。地に落ちた金貨を拾い上げるただそれだけで地面ごと揺れるような感じがした。

ねつとりとした声で、店主は言った。

「したことの報いは受け入れるべきやあ。ひと一人動かしたんなら、汚くてもその金は手に持たねばならんね。呪いや傷跡のようにねえ」

袖口からがつしりとした手が入り込む。袂たもとにちやりんちやりんと金貨が落ちる。それを避けることは出来ない。屈辱に唇を噛みしめる。全ての金貨を入れ終わったところで手首を離される。あれほどの力で締め付けられていたのに、痕一つ残っていないのが不思議だった。

「その金でぶぶ漬けでも喰うてき。ここでは何も出せん」

立ち上がった店主の後ろ姿は妖怪の山と同じように大きい。入道という言葉を出す。大男の妖怪をさすが、人間でありながらどこか化け物めいているこの男のことを言うように思えた。

「……失礼します」

それだけ言い置いて、店を出る。もつと何か言いたかったのに、口先はあくまで不自由でそ

れ以上の言葉を紡ぎ出すことが出来ない。

夏の晴れた空がめまいを呼び起こすほどに眩しい。自暴自棄な気持ちになって駆け出す。人気がない人里を走っていく。まだ午前中で涼しい。

すぐに息が切れて足が重くなる。こんな脆弱な身体ではどこへも行けないのに、気持ちだけが妙に浮き立って飛べそうな気さえして、ただ足を動かした。全身が昂揚しすぎて思わず吐き気を催す。路傍に酸い胃液を吐き出した。袖を動かすことにちやりちやりと金貨が重い音を立てる。

——報い。

——書いたことへの。

途端に気持ちがいぼむ。胸の内が急に痛くなるような気がして、木陰にしゃがみ込む。むなしさが、こみ上げてくる。後に残るのは郷愁にも似た恋しい気持ち。

気づけばつぶやいていた。

「……あいたい」

文に会いたい。

油蟬の音が急に喧しくなったような気がした。夏はまだ終わらない。暑くて苦しい夏はまだ終わらないはずなのに、きつと楽しかったはずの時間が終わってしまったような、新しい友達

と遊んだあの季節が尽きていくような、そんな気持ちになる。

もうきつと手遅れなのに。

文はきつと会ってはいくれないだろう。

阿弥の思い出を切り売りして、文の書くように言葉を遊ばせた私には、きつともう会う資格などない。全部悪いのは自分だ。

哄笑が唇から転びでる。喉が渴いて声が出なくなるまで笑い続けた。

何もない。どこにも行けない。なにもなくなってしまうんだ。全部自分のせいだけど。

日々は元へ返る。この春と同じことが繰り返される。手習いのようにして日常のよしなしごとを帳面に書きつける。

里では私の著した小説が売りに売れているようだった。筆名は低俗な小説にふさわしい低俗な変名を貸本屋が付けておいてくれた。その程度の良心はあるようだった。

母様は私の書いたことに気づかなかった。読めば気づいたかもしれないが、元々そのような低俗なものは見もしないのだろう。

私も献本を渡されたが目も通さずに燃やした。既に書かれたものには興味がなかった。

それよりは早く縁起を書き終わって、そうしてさっさと死んでしまいたかった。

墨を擦る。微細な粒子が解けて、世の何もかもを吸い込んだような深い色をした水に変わる。硯の中に海と陸とがある。そのようにして天地が作られる。

故人曰く、はじめに言葉があつた。

或いは、語り得ぬものについては沈黙しなければならぬ。

又、全ては既に語られている。

言葉について語る言葉は尽きない。けれどそれ自身に深い意味はない。書かなければ終わりは来ない、その一言に勝る物はない。

平凡で事実実に実直なだけの文章を一日に何十枚も書いては母様の目になって読み、そして納得出来るようになるまで自ら破り捨てる日々。

今時分はもとより、秋口の涼しくなり、そして雪の降り積むまではそれを続けているつもりだった。

いや、ひよつとしたらそれは生涯続くことなのかもしれない。納得出来るようになった頃には縁起を書く時間が足りないということもあり得ると思つて戦慄した。その恐怖が尚のこと自分を駆り立てる。右手が痙攣を始める。

量を生んでも仕方のないことだ。本当に魂を打ち込んで文章の質を高めなければ縁起を書く資格などない。記憶を切り売りして書くなど、あのような低俗な文章だから出来たことだ。伝

統と格式ある幻想郷縁起で出来ることではない。

書けば書くほどに頭の中に溢れている言葉が全て虚しい物であるように感ぜられた。それでも書かなければ終わりは来ない。書き続けることでようやく終焉は訪れるのだと信じて右手を動かすより他はない。

わき出る泉のように心から溢れてきた言葉をそのまま書くことは出来ない。それでは過去の御阿礼の子ほどの文章にはならない。巖の如くに堅く確実に世の中に出回るに耐えうる一文にはなり得ない。

妖怪の書いたように自由に書くことなど、私には初めから無理な話であったのだ。私が書くのは自分のためではない。人里の為であり、稗田の家のためでなければならぬ。

書くために生まれたのなら、それを放棄しては野山で咲かぬまま枯れるのと同じことだ。

書き終わって死ぬのなら、天寿を全うしたことに等しい。

誰しも生きて、死ぬ。ならば、それもまた本望である。

本望であるはずだった。

「……っ、」

食いしばった歯。唇を食い破れば血の味がする。手が震える。痛み。こわばった指から筆を無理矢理取り去る。

何がこんなにも哀しいのだろう。

何がこんなにも悔しいのだろう。

生きて死ぬ。

書いて了る^{おわ}。

私の人生にそれ以上のことなど望むべくもないのだ。友人と笑い合うことも必要ない。恋した人と語り合うことも必要ない。アイスクリームも夜空も暖かな腕も必要ない。

ただ文章だけがあればそれで良いはずなのに。

一度知った墮落の味に中毒になっただけのことだと分かっているだけでも、胸の内が疼く。

会いたい、恋しい、笑いたい。

ただ生きることを楽しみたい。

それは——一人では出来ない。

誰かに会って、誰かと一緒におしゃべりしたくて、誰かと共に笑い合いたくて。

嗚咽の聲が出そうになって、顔を歪ませて泣くのを堪える。泣くこと厳禁、泣くこと厳禁、泣くこと厳禁。一人で泣いたって虚しいだけだ。誰も救ってくれないなら、なおさらだ。

不意に、聞こえてくる快活な声。

「はい、ちーんして」

そして何かくしゃくしゃになった懐紙が目の前に投げ出される。

驚いて一瞬息も涙も鼻水も止まった。

懐かしい。アイスクリームの甘みを思い出す、その声。

「にとり？ どうしてここに」

「いやあ、光学迷彩つてのがあつてね。不思議な河童の技術さ。物を透明にする技術つていうのかな。まあ難しいことはいいやね」

紙くずがふわりと空気に溶けたように視界から消えた。

「このまま私がさらつてあげられたら良いんだけどね。どうにも事を荒立てるのは似合わない。光学迷彩は一人分しかないしね」

「さらうつて……?」

「文が大変だから、ちよつと阿求に助けて欲しくつて」

「え?」

何を言われているのか一瞬分からなかった。

あの元気な文が大変な状況にあるというのがあまりぴんと来なかった。それに私が助けられるということも。

助けられているのは、いつでも私だったはずなのに。

「まあ、これを読めば分かるだろう」

すうつとまた紙が現れる。今度は文々。新聞の最新号のようだった。

目を通す。書評。近頃、人里を賑わせている小説のこと。それだけでどきりとして、思わず唾液を飲み込んだ。

しかし、平素の彼女に似合わず精彩に欠く文体。活字もまた死にかけのように薄くかすれている。躍るように力強かったあの号外の勢いは見る影もない。

「妖怪はね、さみしいと死んじゃうんだ」

にとりが言った。

「文だつて普段は気丈にしてるけど、さみしくてさみしくて死んじゃいそうなんじゃないかって、私は思うよ」

「……そうでしょうか」

少なくとも書評ではありきたりな美辞麗句を述べている。それだけを見ればただの手抜き記事とも見えた。

にとりはむつとしたように言った。

「お前さんがそんなこと言っちゃだめじゃないか。書いた張本人なんだろう」

「うつ……」

「どこをどう読んだってこれは文か先代の御阿礼の子の話で、本人のどちらかしか知らないことが入っているよ。文が書くわけ無いんだからそれならお前さんでしょう」

見抜かれている。というか読まれている。今更、顔が熱くなる。自分が何を書いたのか、一言一句克明に覚えているからなおのことだった。

「恥ずかしい、です」

深々と頭を下げる。

「いやいや、」

ぽんぽんと肩を叩かれる。

そして透明な手で肩を掴んだままで言われる。

——その程度で済むかいね。

ぞつとするほど凍った声音。荒げないままで、脅すことが出来るのだと初めて知った。

「こんな文章を書いて、誰がどう思うか考えたかね。死んだ阿弥や生きている文がどう思うのかについて、きちんと想像したかね。大切な私たちの思い出を売り払うことについて、本当に本当に、心の底から考えてみたことがあるかね。ずっとあの二人のことは見ていることしか出来なかつた河童が、あの小説を読んでどんなことを感じたかについていうことをさ」

「はい、ごめ……」

「謝るない」

反射的に出た陳謝を遮られる。それすら許されないことなのだ、声色に顯れていた。

「こんなことで謝つちまうぐらいならお前さんは許されない。誇りを持つて言い訳をするならそれは私にでない、文にだ」

そして、阿弥に。

「書くために生きているのなら、書くことを恥じてはいけない。己の生き甲斐を恥じてはいけない。それではお前さんの費やした犠牲に失礼だ」

厳しいのに、優しい感じがした。泣きそうになつてそれでも泣けなくて、そつと鼻をすすつた。不意に、声が柔らかくなる。

「だからねえ、」

あんたに出来ることを、出来るようになりな。

「直接、あいつに言いに行つてやりな」

この旅を、誰も助けてはくれないけれど。

この話を、誰も救つてはくれないけれど。

天は自ら助くる者を助くのだから。

自分の力だけで道を行くしかない。

「ちゃんと親の許可取って、書庫まで遊びにおいで」

目には見えない声を、まるで輝いているみたいに感じた。明るく差す夏の日の光のように。

「文のために、頼むよ」

見えないけれど、深々と頭を下げられた気がした。

母様にそのままでは話せないことが分かっていた。

ありのままを話すとなれば、私の書いた小説のことさえも洗いざらい打ち明けなければならなくなる。それぐらいなら死んだ方がマシとは言わないけれど、死んだ方がマシだと母様自身が思うかもしれない、そして母様はそう思ったが最後、真剣に死に方について検討して実行するような人なので、生半なまなかに打ち明け話など出来るはずがなかった。

けれど根拠もなしにただ自分のわがままを告げたところで、きっと納得はしない。私の言うことをきちんと聞いてくれるかどうかも怪しい。信用もしてくれないだろう。こちらが向こうを信用していいのだから。

であるのならば外堀から順次埋める必要がある。最初から将と戦つてはいけない。まずは馬を射よ。搦め手を使つてでも母様を騙してでも、人里の外へ出なければならぬ。

良心はじくじくと痛む。吐き気さえする。母様に嘘をついてもきつとあの目でひと睨みされ

ただで、全部投げ出して懺悔したくなるだろうことが分かっている。どこまでも甘えた根性の自分が嫌になる。

だから絶対に逃げ出さないように、自分を縛り付ける意味でも出かける準備をしておく必要があった。

というわけで、先ず貸馬屋に向かった。大人はよくこれを使って里の外れまで行っている。

「あのう、ロバでもいいんですけど……」

「ダメダメつ、落ちたら危ないじゃない」

おかみさんはいつも手厳しい。

「なんだって慧音先生もわざわざ里の外れを遠足の集合場所にしたのかねえ、まったく。阿求ちゃんみたいな身体の弱い子だっているんだからもっと考えて……」

「あつ、あのつ、やつぱりつ、いいですつ……」

断つておくが、私は遠足と言つたつもりもないし、寺子屋と言つたつもりもない。どこをどうしたらそう勘違いするのか私にはまったく分からない。

押し強いおかみさんは腕組みしながらぶりぶり言つた。

「そう言う訳にはいきませんよ。人里のみんなにうちが怒られちまう。ちよいとあんた、穀潰しぐくつぶなんだから阿求ちゃんを送つてあげなさいよ。まったく年上の癖に成績悪いんだからちよつ

とぐらい人の役に立たなくっちゃ……」

馬小屋で干し草を準備している少年に呼びかけた。眼と眼があう。ひどく怪訝そうな顔をしていた。

遠足でないのを知っているんだろう。それどころか、ほとんど寺子屋に行かない私がどうしてそんな嘘までついてここに来たのかと思われるだろう。

「や、やっぱりやめますっ！ さよならっ！」

なんだか怖くなつて急いで逃げた。

どこをどう走つたか。

訳も分からぬうちに人里を逃げ惑つて、それだけで息が切れて、座り込んでしまった。顔を上げて初めて、あの坂を登り切れれば自分の家まで帰れるということに気づく。また明日にしてしまおうか、そんな弱気が頭をよぎり、またうなだれた。

自分に根性の無いことは分かっている。書くことならばどれほどでも苦にはならないのに、それ以外のこととなるとからきしだ。分かっている、口惜しくはあった。

と、誰かが目の前に立ち止まった。いつまでも去らない。誰かと思つて頭を上げる。

灰色の生き物。動物の汗のにおい。くちやくちやと何かかみ続けて、口の端からよだれがた

れている。本物のロバだった。実は初めて見る。

その隣に、さっきの厩の少年が居た。唇を引き結んだまま、しかつめらしい顔をしている。

「ん！」

乱暴な仕草で手綱ごと差し出される。

「……貸してくれるの？」

「んっ」

こくりとうなずいた。

「ありがとう。あの、これお礼……」

貸本屋から貰った金貨をおずおずと差し出す。少年は目を丸くして、それから傷ついたような顔をしてふいと顔を背けた。

「要らねえや」

「え、でも……」

「うっせえ。そんなみつともねえの仕舞つとけよ！」

「う、うん……」

慌てて言われた通りにした。お金を使ったことがないから、作法と違うのかもしれない。ひどく恥じ入ってうつむいた。

「……いいから乗れよ」

そう言われても乗りかたが解らずにぼうつとしてしまう。

「どんくせえな。寺子屋来ないからつて、そんぐらい知つとけよ」

あぶみを示された。足をかけて、それでもちゃんと上にのぼれずにいると、腰に手を添えて助けてくれた。終始乱暴で、ぶつきらぼうな感じがした。それでも乗り慣れない私が気になつて仕方ないのだろう、手綱を引きながら着いてきてくれた。

「ありがとう、ここで」

家の前まで練習として乗る。

少年はますます眉間に皺を寄せて不可解であるということ顔を作つて見せた。

「あ、あの……」

「どつか行くなら連れて行つてやつてもいいぞ」

そこまで早口で言うのと、ますます不機嫌そうな顔をして黙つた。顔と声音だけならひどく怖そうなのに、その言葉だけ聞けば優しそうなのが可笑しくて、少し笑つた。

たちまち少年の渋面が深くなる。あわてて言葉を紡ぐ。

「ごめんなさい。まずは母様にきちんと言わないといけないから」

それが子供というものだから。

「ん……」

何か言いたそうな顔をして、それからすぐに唇を引き結ぶ。最後には重々しい顔をして頷いた。彼の母親も怖ろしいことを思い出したのだろう。

一瞬、互いに目と目を合わせた。さよならともまたねとも言わなかった。すぐに彼の方から目をそらした。顔が紅い。夏のせいかもしれない。

彼は背を向ける。私もそうした。

私は我が家の門を見上げる。黒く太くそびえ立つ柱はその太さの故にひび割れて、それでもなお重い屋根瓦を支えて構えている。それすらまだ門なのだ。その奥の家の大きさ、重み、深さに比べれば入り口に過ぎない。

「おいっ！」

後ろから、叫ぶ声があった。さつきまでの物怖じが嘘みたいな大声だった。何だろうと振り返りかける。

「前、見てろっ！ 馬鹿っ！」

怒鳴られる。慌てて前方を向いた。

「稗田、てめえっ！」

そこで言葉が尽きたらしい。間があく。じわじわと照りつけるような暑さ。蝉の声。夏の日。

過ぎていくのは風ばかり。

「……たまにはっ、」

高い空へ、響く。

「寺子屋来いよっ！」

彼の気遣いは嬉しかった。振り返つてうなずいて微笑んでやりたくなつた。少しだけ肩を動かす。

思いつき怒鳴られた。

「バカヤロっ！ こっち見んなっ！」

怒られているのはこつちなのに、彼の方こそほとんど泣きそうに聞こえた。

少年の足音が遠ざかつていくのを聞く。駆け足で逃げている。声を掛けるだけが、彼の精一杯。彼はそれで良い。ここは彼の家ではない。だから、せめて声を掛けてくれたことだけで私は十分だ。

私は逃げるわけにはいかない。ここは私の家だから。

ロバを門前に繋いで、家へ帰る。再び出ていく為に。

「一人で遠乗りを致したく存じます」

部屋へ通されて開口一番、母様へそう告げた。

「何ゆえに？」

短く問われる。

その語気の鋭い様は刀匠の手によつて良く鍛えられた短刀に等しい。敵を倒すよりは、辱めを受けるより前に自害するのに向いている類の刃物だ。

喉が渴く。口の中が乾いて、舌が張り付く。

「……書く、ために」

やはり、それ以外の理由が思いつかなかつた。

私がおかをするとなれば、書くという動機は常に根底にある。けしてそれは嘘とは言えない。書くために食べて、書くために呼吸をして、書くために生きているのだから。

「何を書くのですか」

母様の問いは、重い。

そして、いつでもその問いは自分に向けてきた。何を、何のために、どのようにして書くのか。その意識がそこになれば、何を見たとして杳ようとして定まらぬ。

私は一呼吸の沈黙の後に、腹の底から声を出して宣言した。

「縁起を、書きます」

母様が息を呑んだのが分かった。

「書けるのですか」

「書かねばなりません」

その為に生まれてきた。

書けるか書けないかではない。書くのだ。

「いつ、書くのです」

「いつかは」

人生はまだある。短くても、まだ続く。

いつかは書ける日が来る。それを信じて準備をする。

それが理解されないのなら、こちらにも覚悟がある。

まなじりを上げる。黒い目と目が合う。同じ色をしている。同じ形をしている。深い闇の中に落ちていきそうに業を負った瞳の中へ、決意を込めて視線を送る。

「許されないのなら、自分から出ていきます」

刃を突きつけるつもりで、口にした。

「幻想郷縁起を書くためには、幻想郷を見て回らねばなりません。それはいざ書くとなくなつてからでは遅いのです」

母様がするように、言葉を研いで鋭くして相手の喉元へ突きつける。

言葉は剣よりも強い。そうあるべきだ。

私は稗田家の者で、母様の子で、そして御阿礼の子だ。ならば言葉において並ぶ者など居てはならない。書くために生まれたと自称するならばどのような刃物よりも鋭利な言葉を口にすべきだ。

なべてその挙動は、書くためにあると知れ。

半ば目を瞑ったようになって、母様は身じろぎもしなかった。深く深くその言葉を受け止めて、そして微動だにせぬ。残り香のような余韻が全て消えて、中庭の鹿威しが一度鳴った。

やがて母様の唇から沸いて出た言葉は、ひどく聞き慣れない違和感を伴って空気を震わせた。

「門前に止めてあるロバはあなたの物ですか」

私は突然の話題の転換に眉を動かさぬようにするのが精一杯だった。

「ええ。万が一落馬して怪我を負ってしまったては素も子もない。私だってそれぐらいは考えているのです」

「ふむ、品のないことですね」

母様は少しだけ表情を明るくした。

それが微笑したのだと分かるまで、一呼吸かかった。

咎めているのではないのだと分かるまで、五数えるほどの時間が掛かった。

初めから禁じられてなどいかなかったのだと分かるまでは、庭の鹿威しが三度鳴るほどの時間を要した。

「え……?」

喜ぶより先に、戸惑い。

母様が、笑う、など。

「何処へ行くのか、帳面へ書いておきなさい。万一の時には探しに出ます。くれぐれも安全には気をつけるように」

「は、はい。ありがとうございます」

深く頭を下げる。凝り固まっていた身体がほぐれていくのを感じた。

「言うまでもないでしょうが」

声を掛けられて、視線を上げる。

母様の黒い双眸が私を貫いていた。放つ光は、今もって鋭いままだ。優しいのかそうでないのか分からない。

「中途半端な物を書けば、それは恥になります」

あの貸本屋と同じことを、母様が言った。

「稗田の家をあまり舐めないように」

言葉尻のわざと荒れた風なのは、その優しさを隠すためのような気がした。

「人である前に、物書きなのですよ」

生きるために物を書くということ。

物を書く生き物であるということ。

物を書かなければ生きられないということ。

書かなければ生きる資格がないということ。

「物書きとして生きるということは、そういうことです。人の持つ権利などはそれを果たした後に初めて存在しうる」

息を継ぐ。細い喉がひゆうと鳴った。

「書かない稗田家に、存在価値など無いのです」

以前ならきつとその言葉で傷ついていただろう。

でも今となつてはそれが当然のことのように思える。

少なくとも何かを、書くことが出来たからか。

「稗田の者は書かなければ生きていけない。私も知っています」

母様の目をしっかりと見据えながら、私は答えた。

もう逃げない。負けない。

「けれど生きなければ書くべきものも無いのです。確かに生きることが出来なければ形骸化された文章を書き連ねるに過ぎないでしょう」

私が思うそのままを口にすると、母様は唇を歪めた。

こんなにはつきりと笑っているのを初めて見るかもしれない。その笑みはひどく化け物じみて、そして、あの入道のような貸本屋と本質的に共通のもので、歪な感じがした。

弁当と笠と脚絆とわらじ。乗馬用のマチの深い袴に履き替えて、旅支度をする。

「ちよつと重裝備過ぎやしませんか」

「備えあれば憂い無しです」

母様は手ずからロバの荷袋を結わえ付けつつ言った。

「夕飯までに無事に帰って来なければ、探しに行きますから」

「……はい」

「また先日のように若い衆を動かすと、稗田の外聞によろしくありません。くれぐれも心配させぬように」

「それなら探さなければいいのに」

「そういうことを言っではいけません」

むっと口を引き結んで、母様は言った。ロバに乗っているせいで背丈の差が縮まっていつもより表情がよく見えた。いつも下から見上げていたせいで、暗くいかめしく見えていただけだと分かる。

真横から見た見た母様は、なんとというか、ただの大人だった。上手い言葉で表すことが出来ないけれど、ただ、静かで大人なだけなんだと思つて、自分もきつと大人になったらこんな風になるんだろうとそう思つた。

「無事に帰つてきなさい、と、そう思つただけです」

母様にも笑い皺があることを、今日私は初めて知つた。

森の中をロバが歩く。蹄の音が単調に響く。一人きりなのがよく分かる。誰もいない。前を向く。自分の足だけではたどり着けないだろう。大人の足でも一刻以上掛かった。あの晩には大勢いた。母様も文もいた。

自分の書いたもののことを思い返す。

そう言えば、阿弥の頃にはあのように大勢で歩いたことがなかった。あの頃は本当に、二人きりだったのだ。

文の腕に運ばれ、背負われ、動かされるばかりで。

二人きりで出口の見えない中を手探りで。

どれだけ模索しても、触れるのは互いの身体だけで。

それすら、私のものは近いうちに朽ちてしまうことが分かっていたけれど。

息をついた。

道を行くうちに腰と背中と足の間が痛くなってきた。休みたいが、手綱を引いても力が弱すぎるのか、ロバが止まってくれない。方向だけはどうか解ってくれるものの、どうにも不安だった。

しかしそのうちにロバも動かなくなつた。小高い丘にほどよい草地と水場を見つけたのだ。もぐもぐと草を噛み非常に居心地よさそうではあつた。ロバはこれ以上一步も動くものかという強固な意志で食事を始めてしまった。

仕方がないので私もお昼にしようと思つた。梅干しを入れたおむすびをロバに乗ったまま広げようとして、手が滑る。落としてしまう。絶妙なタイミングでロバに踏まれる。泥と糞にまみれてぐしゃぐしゃだ。

「あー……」

お腹がくうとなる。泣きたい。

水筒もカラだ。

もう、とりあえず降りることにする。どこかに食べられる蜜柑やアケビなど成っていないかと思う。えいやと意を決して飛び降りる。足首をくじかないのが奇跡だと思った。おむすびが潰れた分の不幸を帳消しにする程度の幸運。

歩いてみてすぐ分かる程度に、足ががくがくする。無意識のうちに内ももを締めて乗るから、普段使わないところを使っているのだと分かる。

竹の水筒に詰めた水はほとんど道中で飲んでしまったからせめて汲もうと小川へ向かう。足を踏み外して裾を濡らしてしまうが、全身で落ちなかったただけまだマシだということにする。

「つて、いないし！」

振り返ると忽然とロバが消えている。さつきまでとてつもなく頑固に大地を踏みしめていたのに、なんとという気まぐれだろう。

荷物もロバにくくりつけたまま。母様が準備してくれたものの全部。旅装だけは身につけておいたから無事だったが、空腹は満たされない。

「あうー……」

がつくりとうなだれる。しゃがみ込みたくなって、でもそこにロバの落し物がしつかりあるのを見てしまつて、慌てて立ち上がる。

きつと見上げる。道はまだ半分以上残っているように見えた。

まだ足がぐくぐくするけれど、自分の足で歩いていくしかない。雲行きが怪しくなっているのが気に掛かる。嵐になるより前にたどり着かなくちゃ。

ふと袂の一つ、あめ玉が残っていた。夏の暑さに負けてべとべとに溶けてしまっているけれど、ありがたく包み紙まで舐めて味わった。レモン味の甘酸っぱい味が広がって全身の疲労をいやしてくれるようなそんな気がした。

いつ誰にもらったものだろうと思ひ返して、それは一番最初に会った日なのだと思ふ。

あのとき、私はすっかり文のことを覚えていなかった。むこうも私のことに気がついた様子は無かった。まったくの初対面のようにして二人で笑いあつた。

今はもう思い出してしまった。

お互いのこと。昔のこと。そして、書いてしまった。あらわにしてしまった。もう元の友達のように戻れないのだろうか。重いため息ばかりが口からこぼれた。

気がつけばはらはらと雨音が聞こえ、道はしずくに濡れていた。使い手に似ずに傘と脚絆は優秀だった。それなりにひどい雨の中を難なく歩くことが出来た。土の道はぐじゅぐじゅと泥だらけではあるが、それでも平素とさほど変わらない。

自分の両方の脚が交互に動くだけで前に進む。それはなんと理想的なことだろうか。心を肉

体にくだかなくて良いということは。今更ながら私が色々なものに支えられていることを強く感じた。

森が一度開ける。道の脇に背の高い草が生えている。見通しは悪い。その中を冷たい雨が過ぎてさらさらと不穏な音を立てる。

不意に、自分が下り坂を歩いていることに気がついた。先刻までは登りだったものを。一瞬頭が混乱する。目を上げる。高草の合間から山頂が見えた。文とアヤのいるあの書庫へ向かわなければならぬ。確たる自信はない。なら、山頂を指すのでは迷ってしまう。

この道が正しいのかどうかは解らない。

この先が上なのかどうかすら解らない。

ただ、前へ進むよりほかない。

その為に二本の足は在る。

己の記憶だけを頼りに歩む。脚が泥にまみれ平素より重くなってきた。気持ちもそこら切り離す。ただ景色が後ろに進むように気持ちだけを前へ、前へ。

地に落ちていた見覚えのある看板の破片を見て、これほどまでに胸が熱くなったことはなかった。ただ『あいす』の看板が泥にまみれて落ちていただけだというのに。少し行けば☆の半分が、そしてさらにゆけば☆の残り、そして『くりん』の字。ペンキが垂れて血文字のように

なつてしまつてゐるその書き文字。今は誰が書いたのか解る。この字は文。看板全体の造形は多分にとりだろう。あのワゴンはにとりのものだから。

見上げれば切り立つた崖の中に入り口が眼窩のようにぽっかりと穴を開けていた。

入り込み、書庫の扉の前に立つ。鍵は持つていない。おずおずと戸を叩く。返事はない。ただこだまが岩壁に反射するばかりだ。

「文？ いないの？」

呼びかける。からりと軽い音がして扉が開いた。闇が垣間見える。光はない。うざりと蠢く何かの気配。

「……アヤは、いるのね」

声はしない。ただがさがさとかかかすれるような音ばかりがする。中に入るかどうか一瞬躊躇つた。

扉の隙間から、一冊の本が差し出される。

『まごころのおもてなし料理 上巻』

表紙に載つてゐるビーフシチューを見るだけでぐう、とお腹が鳴つた。

よく分からないがアヤなりの歓迎なのだと思う。

「……ありがとう」

床を這い回る髪を踏んでしまわないようにそつと足を踏み入れた。

すると寄せては返す波のように黒い髪が部屋中を取り巻いている様は、端的に言つて氣味が悪かつた。

部屋の入り口近く、以前には無かつた箱とランタンがあるのに氣がついた。かがんで灯りをつける。一気に髪が周りから引いていった。

火が恐ろしいのだろう。燃えて消失してしまうから。

ようやく部屋にわずかながら灯りが点つて、周りが見渡せるようになる。地べたに正座をして低い天井を埋め尽くすように柵が乱立して、ただひもでくくられただけの新聞紙や書籍が隙間もないほどに詰め込まれていた。埃っぽいその場所を、前ほど嫌いでないことに氣がつく。

書かれたものが読まれないことは哀しいことではない。世に出て生まれただけで、十分幸いなことだと感じる。本当になさしいのは世に生まれなかつた言葉たちだ。書かれずに消えていくものたち。

箱の上に視線を落とす。机代わりに使つていたのか、原稿用紙が散らばつている。原稿には二種類ある。片方は見覚えのある手書きの丸文字。

「こつちは……文かな？」

ぱつと見の印象は原稿用紙が黒い、ということだつた。間違いを消した二重線だらけでどこ

を読めばいいのかわからない。かなり迷いながら書いている感じがしたけれど、その断片を読むだけで背筋がぞくぞくする。言葉が水晶の割れたように尖って肌の上をちくちく刺すように暴れている。文章の欠片だけでそう感じる。短いその数行を何度も貪るようにして読んで、ほうと息をついた。

不意にもう一つの方に目をやる。ほとんどデタラメのようにして、新聞記事から文字列が切り取られて並べられていた。一瞬脅迫状なんじゃないかと思うぐらいに不揃いで剣呑な雰囲気でした。所々何マスか空いているところを考えると、まだ一文すら未完成なのだろう。

『心』『中』『私』『生活』『こ』『い』『あ』『や』……意味がまったく通らない。何度か読んだが結局よく分からなくて首をかしげた。

くいくいと指先に髪の毛が絡まって引つ張られる。猫が甘えるような力加減だ。

「どうしたの？」

おそるおそる首を横に向ける。本体がどこにあるのだから見当も付かないから、呼びかける方向も定まらない。

気をそらした瞬間に手に持っていた原稿用紙を奪われる。ごそごそと奥の方に仕舞われてしまった。

「あれはアヤが……？」

返事はない。ただ光の届かない奥からまた一冊の本がずるずると這うようにして流れてくる。
『はてしない物語』

また一冊。

『バベルの図書館』

続々と、本の山。

『打鍵猿たち』『宇宙ヒツチハイクガイド』『精神の諸能力に関する俗説』『no longer human』『まだ人間じゃない』『書きあぐねている人のための小説入門』『文章読本』『小説の誕生』『読解・作文トレーニング六年生』『新レイアウトデザイン見本帖 書籍編』

「わかった、わかったから、もういいですっ」

このままでは本に埋もれてしまう。

すると波が引くようにしてその本たちも下げられていった。

「アヤも、何かを書きたかったのかな」

呼びかけると、また髪の上を本が流れてくる。

『絶対肯定』『灰』『杯』『それでも人生にイエスと言う』

「……わかったから落ち着いて」

またぞろぞろと引き上げていく。意外と興奮しやすいようだ。

と。

「ふふふくん♪ ふふーん♪」

変な鼻歌が扉の外から聞こえてきた。嫌な予感と共にふりあおぐ。

何か持った文が扉を開けたところだった。向こうも気がつく。大声で叫ぶ。

「なななななんどこんなどころに阿求が居るんですかつ、夢っ？ 幻っ？ ていうか熱っ！」

「わわわっ！ 文、気をつけてっ」

「あちちあちあちあち、ちよっ、机っ、机持ってきてっ！」

箱をずぎーと滑らせる。文が足で止める。取り落とす寸前で持ってきた湯飲みをそこに置いた。ぺたんとしやがみこんだまま、ふーふーと両手を吹いて冷ます。

覗き込む。ちよっとだけ赤くなっているような気がした。

「火傷した？」

「いいえ、全然。天狗は丈夫ですからね。というか、どうしてこんなところ？」

「……いや、だって、その、」

にとりから落ち込んでるって聞いたから。ずっと書庫にこもりきりで出てこないって聞いて。

「あれー……？」

目の前で緑茶を啜っている文と、聞いている様子とではだいぶ違う。

文は考えていたが、やがて一つ大きく頷いてごくんと飲み込んだ。

「あー、大体分かりました」

ぱちんと指を鳴らした。

「にとり、観念して出てきなさい」

一瞬の間。

「ちえ、バレてら」

後ろから声があった。振り向く。ウン、と音がして虹色の影が浮かび上がる。たちまち河童の姿が現れた。

「バレないわけ無いでしょ。こんなバレバレの手使って騙されるのなんて阿求ぐらいのもんですよ」

「ぶうー」

にとりも床にあぐらをかいて、唇を尖らせる。おずおずと私は尋ねた。

「え、えーと、ひよつとしてあの書評も……?」

おずおずと懐から新聞を取り出す。

「偽造は得意なんでねえ」

「いや、どう見ても偽物なんです」

一読しただけで文に一蹴される。

「うっさいやい！ そのチーフ感はずごとだつてば！」

ぷいぷいと怒る。見事に騙されたのは私だけのようだった。

「そんなことよりねえ、にとり」

ことり、と飲み終わった湯飲みを置いた。空なのに、それはひどく重く聞こえた。

「あなた、これで二度目、ですよ」

さつきまで穏やかだった文の声が、僅かに尖っている。にとりの方も苦笑の中に歪みが混ぜられている。

「分かつてらい。次からなるべくしないさ」

「なるべくつて、何の保証にもなっていないでしょう」

「そんなこと言つたら、あんたの方こそ、自分を粗末にするようなことは二度としないつて言つただろうに」

「してませんよ」

「物理的には、つてことだろう。精神的には痛々しくつて見てらんないよ」

にとりは小さく首を横に振つた。

「気にしすぎです。にとり」

文は静かに笑む。その笑みに陰りを感じた。以前の文とは違う何かが含まれている。どくん、と心臓を掴まれたような気持ちになる。

「私がしているのは、ただの執筆活動です。平素やっていることと何一つ変わらない」「そうじゃないだろう……そうじゃないんだよ、私が言いたいのは」

冷え切った洞窟の空気。闇が濃さを増したような気がした。

「だいたいさ、文は阿求に甘過ぎるよ。ちゃんと叱ってやんなきゃダメだ」

にとりの言葉には熱がこもっている。過剰なまでの情熱。

「すぐ死ぬとか弱いとか、そんなの理由にならないよ。相手が弱くたってちゃんと言うこと言わなきゃ。そうじゃないとお互い辛いまんまじゃない」

思い出す。

——あの二人のことを見ていることしか出来なかった。

確か、にとりはそう言っていたんだった。

「あんたは、阿弥には何にも言えなかったじゃないか」

じつと、見ていたんだ。

ずっと、見ていたんだ。

一度目の時には、そうやって。

ただ見ているしかできなくて。

結局、後悔することになった。

「だから二度目の今回は私が代わりになって、言うべきことを伝えたんだ」
ちゃんと会わせなくちゃと思つて。会わせて、謝らせなくちゃと思つて。

「気持ちがありますよ、にとり。けどね、」

大きく息を吸う。

「誰が、そんなことしていいって言いました」

壮絶なほどに真剣な顔。

「私の自尊心のために戦つて良いのは、私だけです。他人がそれをやるというのは、ただの傲慢です」

「そうじゃないよ、文」

にとりの言葉が研がれていく。

「あんたと阿弥の大事な思い出が、薄汚い男どものセンスリのネタになってんだろ？ そんなの、お前が許したつて友人の私が許さないっ！」

ひととき強く机を叩いた。響いてなお冷めやらぬほどに、部屋の空気を沸き立たせる。

「阿求、あんたは許されないことをしたんだ」

再びこちらを向く。その目は平素に似合わぬ程に真剣味を帯びていた。

「長く生きて、好いた人間においていかれた妖怪にとつて思い出ほど大事なものは無いのに」
血のにじむような呼気。その熱に打たれる。

思い出を汚されたのは、文だけじゃない。にとりも同じなんだ。

「それを汚すなんて、本当に許されないことなんだ」

雨すら蒸発しそうな、熱い魂のほとぼしり。

「いいえ」

それを冷ますように、文の声が降る。

「それは間違いです。許します、私は」

墨にまみれてさえ、なお美しいその指先。

「阿求が本当にそれを書きたかつたのなら、それを妨げることは出来ない。少なくとも私には」
いや、その指で言葉を紡ぐ者なら、誰であれ、書くなど言えるはずがない。

「私だつて書く者の端くれなんです。書くために生きているようなものです。好きな人が自分の書きたいことを書けないのなら、私にとつてはその方が辛い」

指先が近づく。避けられない。

手を握られる。暖かい。この暖かみを確かに知っている。自分の中の、昔の自分が。

「あれはあなたの中の阿弥が書きたがったのでしょう？」

「……っ」

頷いていた。そうしようと思うより前に。

死ぬ直前に、本当に書きたいことが出来たのに、書けなかったから。

もう一度肉体を取り戻すことが出来れば、一文字でも多く何かを書きたい。記憶の海に潜つてすぐに、何かに取り憑かれたようになって文字を書いた。もう頭の中では書かれていたんだ。ただ手が動かなかっただけで。

「……あんたがいろいろ言うんなら、しょうがないけどさ」

肩をすくめる。どこかまだ不平が残っている様子だった。

「だってねえ、にとり。あんなすごい話、私は初めてですよ」

文はどこまでも笑っていた。

「心の奥がじくじくつてして、痛くて、懐かしくて、確かに何か落ち着かない感じはしたけど」

それ以上に、もつと心の奥を震わせるのは、

「あれを読むと何かが書きたくて仕方がなくなってしまうんです」

組み合わせられている文の手。爪の中までが墨で汚れている。あの話を書いていた時の私と同じように。

さっきの、書き損じの原稿用紙を思い出す。

「文のそれは仕返しじゃないのかい？」

「んー、仕返しして言うか……お返し？」

文はにんまり悪戯つぼく笑つてみせる。

「物は言いようだねえ」

にとりがあきれたように返す。

「風遣いは言葉遣いですからね。鴉天狗は皆、口先から生まれてくるんです」

「呪いの塊のような原稿だったけど？」

「まあ、そういうシーンがあつた方が盛り上がるんでねえ。大丈夫。最後はハッピーエンドで

すから」

そう言いながらさりげなく原稿を隠す。

「最後まで出来てから読んで下さい。恥ずかしいですから」

目をそらす。頬がかすかに朱に染まっている。

「やれやれ、心配した私が馬鹿みたいじゃないか」

肩をすくめて顔を背ける。おどけたように文が覗き込む。

「嬉しいですけどね。そういうの」

「慰めはよせやい。一人での外れだったってことじゃん」

ふうつと頬を膨らませた。

「いや、的外れでもないですよ。あれだけ上手くなければ、私も嫌な気持ちになつていたかもしれない」

こちらを見て、そつと手を握る。

深い紫の瞳にとくりと心臓が音を立てる。

「アヤにすら、何か書きたいって気持ちにさせたんです。切り抜きだらけの、意味を為していない言葉だけ。生まれかけのまだ言葉を発することも出来ないような妖怪にすら何か書きたいと思わせるほどの圧倒的な物語の力。あんな凄い物をなかつたことになんて私には出来ません」

その言葉に、とうとう我慢出来なくなつた。ぽろぽろと熱いものが込み上げてきて、止まらない。

「ありが、とう」

「え、ちよつ、阿求!? 泣くことないでしょ。褒めてるんだから」

慌てた様子で文が言った。

「だって、だってこんな風に言われるのって初めてだから」

「そんなに泣くほど酷いこと言つたつけ……？」

「違うの」

嬉しかった。

生きているうちに、そんな風に褒められること。親しみを込めて、人々がたたえてくれること。褒めて欲しい人に褒めてもらえること。

それは、どんな代の御阿礼の子でも、経験したことのないことだった。

太古の昔から、本が世に出来るのは、死んだ後のことだった。印刷技術が出来るより以前から幻想郷縁起は存在する。

つまり、転生先が常に書家であるということの意味。

御阿礼の子が一生を賭して書いた原稿を、残された一族総出で書き写し、人里に棲まう者全てへ配布し、妖怪に関する注意を促す。稗田の家の本当の仕事がそれだ。その役割の故に稗田の家は人里の中で権力を持ち得る。

死ぬ間際、稗田の家に文が入り込めたことの意味。

書き終えた御阿礼の子は一人静かに横たわるのみだ。

別室では、一心不乱に筆が走っている。血を振り絞るようにして書かれた文言の一つだに疎かにせぬよう、写本が続けられる。

転生の儀式を終えた御阿礼の子を、誰も看病などはしない。看取ったりもしない。それは無駄で、価値のないことだ。書き終われば価値などない。ただひっそりと息を引き取るだけだった。特に八代目の没する直前はその傾向が顕著だった。妖怪の力が弱まりゆく頃だったからだ。

稗田の家の権力もまた衰退する可能性を恐れて、人々はより一層縁起の普及へ力を込めた。縁起が求められないのならば一族郎党飢えて死ぬ。誰もが生きること必死であり、じきに死に往く者の行く末など気が回るはずもなかった。

だから、置いて行かれた肢体には、怨念が籠もる。女の命である髪の毛であればそれは思念の固まりのようなものだ。それが読まれない本に込められた想いと融合する。

——え？

『怨念』だって？ 何のことだ？ 私は知らない。そんなものがあるなんて。どうして、そんなことを知っている？ そんなことの心当たりなんて。

ぞわり、部屋中の不穏な闇が蠢く。

……闇？

カンテラが、あるのに？

さつきまで安らいで笑いあえるぐらいには明るかったのに？

「……アヤ！」

声が飛ぶ。

壁を埋め尽くしていた黒髪が、うねり飛んでくる。

「きやあつ！」

手首に絡み付く。引きちぎられそうなほどの強い力に悲鳴がこぼれる。

そうだ、髪。阿弥の遺髪。火葬に付された他の部分と違って、唯一そのままに残された阿弥の身体の一部。その怨念が籠もって一体の妖怪の元となる。

「阿求っ！」

文が手を掴んでくれる。強く引くとぶちぶちと嫌な音がする。手首に赤い痕。

何か割れる音。一瞬の暗闇、そして明るさが再び増す。

当然だ。本は燃える。どれだけしけつていたつて紙は紙だ。焦げた匂いが鼻をつく。にとりが叩き消そうとしても、髪の毛が周りを取り巻いて近づけさせない。

首、腕、足首……全てに絡み付いて邪魔してくる。動けない。

「けほつ、ごほつ」

喉を強く絞められて咳き込む。

「くっ……阿求っ！」

甲高い風音と共に解放される。真空の刃で切ってもらつてようやく息が出来るようになる。

次から次へと絡み付いてくるのを次から次へと切つて貰う。きりが無い。

「阿求つ、こつちに！」

文の腕の中に飛び込む。守つてもらうしかない自分が悔しい。

ひねつてねじつて硬い棘のように寄り集まった髪が飛んでくる。文の足をかすつて血が流れる。

「アヤ……なんでっ！」

返事はない。代わりに降つてくるのは、焼け焦げた本の表紙。

『Jerous』『憤怒』『未練』『闇からコレを焼き尽くせ』『灰かぶり』『黒い夏』『鈴木商店焼打ち事件』
全てを定かに読むことは出来ない。気を抜けば長く伸びた髪が全身へ絡み付こうと襲つてくる。

「文、ここじゃダメだ、逃げなくちゃ！」

ひどく焦っているにとりの声だけが聞こえる。

「分かつてる、でも……！」

振り仰いだ扉は一つきり。黒髪でがんにがらめにされて完全に封鎖されている。

「っ……」

見ていることすら辛いほどにじわじわと煙が周りを取り巻いてくる。目が痛くて、瞬きをす

るごとに暗さがしみ通ってくるようだ。喉が痛い。鼻の奥がつんとしてじんじんする。じつとしていられなくて、どうにか隙間でもないかと動き回りたくなる。

と、文がささやいた。

「ちよつと静かに……何か聞こえませんか？」

言われた通りに息を殺す。

遠くから声が聞こえる。文が何か唱えるとそれが拡大されて聞こえる。声もまた風を伝わってくるものだからか。

大勢のざわめきが、聞き取れる。

「阿求ちゃん！ どこにいるんだいっ！」

「稗田つ、てめえ、居なくなったら承知しねえかなっ！ 貸したロバしか帰って来なかったじゃねえか！」

「ぐぶぶぶ……あれほどの書き手がこの世から無くなるなど、絶対に許せん……しかし、この、坂道は、息が、切れる……」

馬屋のおかみさん、級友になつていたかもしれない少年、貸本屋。

「阿求ちゃんつてば、まったくもうお母さんを心配させて」

「帰ってきたらおしりぺんぺんだわねえ」

「妖怪にさらわれてないといいな。僕が悪い本を教えたせいだったらどうしよう……」

「つとによお、たまの休日に酒喰らってたらかり出されちまつたい。ついてねえや」

「また昆虫採集かねえ。だとしても道に迷ってんじやないかい？ 崖から落ちでもしたら大変だよ」

お隣の筆屋さん、はすかいの紙屋さん、二丁目のお箸屋さん、男衆たち。

「……みんな」

人里の大勢の声を聞いて、アヤの髪の毛の動きがぴたりと止まる。逡巡。

「いまだっ！ 変っ身！」

にとりが高らかに何か掲げて、宣言する。

手の内で燦然と輝いて見えるのは鉄の小箱。

「あつ、あれはっ！ じえいそん丸！」

こんな時でも合いの手を忘れない文は友人として立派だと思ふ。

「ぼちつとな！」

かけ声と共に喧しい音を立てて組み立てられる。間に髪の毛が挟まってもお構いなしだ。河童は本体だけでなく機械まで頑丈に作られているらしい。のこぎり単体だけで、一種の妖怪なんじゃないかと思うぐらいに絶好調であった。

電源を入れる。さっきの比にならない騒音を立てて刃が回転して髪の毛ごと入り口の扉をばっさばっさと切り刻んでいく。

「かつこいいとは、こーゆーことさ！」

振り返らない背中に悔しいぐらい、見とれてしまう。

網状に絡み合う髪の毛が再度扉を封じようとしていた。さっきよりも嚴重に絡み付いてくる。

「ちつくしよおー、負けてらんないねっ！」

袖口で汗を拭う。その口元には余裕の笑み。

「にとり、気をつけて」

「お前は阿求の方を気をつけてやんな。大好きな友達も守れないなんて、何のための力さっ！
うりやあっ！」

雄叫び。そして突進。

何度も繰り返される斬撃と絡み付く髪の毛の攻防。

「あつ、ここから音がするっ！ おおい、阿求っ、阿求っっ！」

扉を叩く。大きな音。たくさんの拳。強く強く分厚い扉を叩く。

「でえいっつ、人間、怪我したくなきやどきなっ！」

周辺をあらかた切り取ったところで蹴り破る。新鮮な空気が一気に吹き込んでくる。ばさば

さと燃えた紙があおられる。舞い散るその全てが呪詛の言葉。

その暗い意志と同期して髪の毛が増える。文の肩めがけて飛来する幾千万もの針のような風で打ち消す。逸らす。それでもなお避けきれない。肩口に一筋が刺さる。

「くっ、」

小さく息を漏らした刹那、私を囲んでいた腕が緩む。しゅるりと両手両足に絡み付く髪。全身を囚われて部屋の奥へ引きづり込まれる。

「阿求っ！」

伸ばされた文の手をすり抜けて、暗黒の奥へ奥へ。穴蔵の底、本の墓場へ。

「待ちなさい」

凜としたよく通る声。

全てが動きを止めた。

「まったく……どこに行つたのかと思えば。夕飯までに帰つてこないから迎えに来ましたよ」

母様の声。こんな時だのに唇をきつと引き結んで取り乱さない、そんな落ち着いて冷静な声。

「母様、この子は……」

「また新しいペットと遊んでいるのですか」

母様は冷たく笑う。こんな時だと言うのに。

「そうじゃなくて……」

「そろそろ先代の幻想郷縁起を読んで勉強なさい。とりわけ阿弥様の書かれた縁起ほど素晴らしい書物は無いのだから。先人を学ばずして新しいものなど生まれ得ないはず」

その、言葉、は、

どんな斬撃よりも、決定打だ。

私の身体を締め付けていた髪がかすかに緩む。力が弱まっている。

生前に読まれたことがない、褒められたことがないという怨念を動力としてアヤが暴れているのなら、それを沈静化するための方法はただ一つ。

褒めて褒めて褒めちぎるだけだった。

「うん、縁起はすつごく面白いと思います。阿弥の書いたものが特に好き」

私はあわててそんな言葉を口にした。みんなに向けて目配せをする。

感づいた人里の者も口々に叫ぶ。

「そ、そうだ。俺たちが無事に出歩けるのも先代の縁起があるからだ！」

「一家に一冊絶対あるもんな！」

「寺子屋の慧音先生にあれで字を習ったんだ。すげー難しかったけど、あれ以後どんな本でも読める気がする」

「持ち運び用全十六巻から、保存用全六巻まで当店では幅広く取り扱ってますわあ。アレと暦だけは絶対に毎年売れる」

母様の声もまた、そこへ混ざる。

「人里があるのも私たちが生きているのも全てそれは縁起のおかげ。縁起のために稗田の家があり、稗田の家によつて縁起は保たれる。偉大なる先代なくして、私たちは生まれ得ないし生きながらえもしない。脈々と受け継がれる書き手としての血が無くては、私たちは親子たりえない」

大きく息を吸い込む音が聞こえる。

ひととき高く声をあげる。

「偉大なる阿弥の意志を継いだ阿求の母としてこの子の傍に居られたことを、私は誇りに思います」

そのまなざしの先には私が居る。黒々とした深い双眸のよく似た私たち。血と宿命が私たちを結びつけるのなら、そこから逃れることは出来ない。

出かける前に見た母様の笑みの意味がようやくやく腑に落ちた。そうしてふつつつとその言葉の

熱さが腹の底へ落ちてくる。

その笑みは、書く者の笑み。

悪いことをしている顔。

書くことが悪いことだと知っている顔だ。

私も母様へ向けて、声を飛ばす。

「母様、私も母様の子で良かったと思います。稗田の者として書き続けることが出来て良かったと思います」

母子というよりは、共犯者のような気持ちで、私たちは互いに微笑を浮かべ合った。

「言うようになりましたね、阿求」

「ペットを飼ったら色々ありましたので。言える時に言っておこうと思ひましてね」

「成る程」

そのまま私たちは互いの腹を探るような気持ちで笑いあう。そのような在り方が正しいとか正しくないとか他人に言われる筋合いはない。私たちが自分自身でこのような在り方を選んだ。そのこと自体が正しい。

私を捕らえているアヤの力はもうほとんど緩んでいる。

あと一打。

強い期待を込めて文を見上げる。

「え、えーと……」

戸惑いの声。文はやがてぎゅつと唇を引き結んで、それから大きく息を吸った。

その一息は、長かった。

くちばしから先に生まれた鴉が、その腹にため込んだすべてを吐く。

「そうですっ、阿弥の書いた文章は本当に格調高くて難しい単語も多いけどそれがまた雰囲気
を醸し出していて見た目に明らかに漢字の密度が多くて、読んでる妖怪側としてはそれが良く
研がれた刃物を目の前にしているような、いや、刃物なんて軽々しいものじゃなくて斧とか鉈
とかギロチンとかその類の明らかに片手じゃなくて両手で持たなきゃいけないぐらい重くて冷
たくて硬くて黒くてまさに字の塊で押し通してくれるぐらいの重量感なんだけど、だがそれが
いい、みたいなそういう誰にも書けない物を阿弥は持つていたと思いますし、それがあんなに
小さくてひよろくて細くて骨と皮ばかりで胸もなくて抱き心地の本当に悪い女の子でしかも
攻める側に回るにはあまりにも体力がなくてアソコに指突つ込もうとしても五秒で中指を擰る
か腕が筋肉痛になるぐらいでしょうがないから私が大事に大事に壊れものみたいに抱いてあげ
るしかできなかったあのの子が書いた文章だつてこと自体が私にはなかなか理解できなくて時々
あとからもらった縁起を読んでいて本当に重くてつらくて思わず破り捨てたくなったりもした

けど結局ぴりって端っこ破いただけで慌てて泣きそうになってセロテープ探して貼ってそれでもそんな気持ちに駆られた自分が情けなくってしょうがないから自分の手で書き写すんだけ自分の丸文字じゃやっぱりどうしようもなくあなたの書いたものにはなり得ないから人間の持つている稗田家が書写した縁起をパクって読んでたぐらいにはあなたの文章が大好きでしたというか好きです大好きです愛してますって生きているうちに言えれば良かったけどあなたは人間だったからどうしても死んじゃうもんなだって自分に言い聞かせて忘れようか忘れまいか迷っていたりしていたことなんてあなたは当然知るわけが無くて、だってあなたは私が悩んだりうじうじしたりするところを知らないまま死んでしまっ、ていうかいつでもなんだかカッコつけてしまっていた私も私なだけけど、もつとみつともないところを少しぐらい見せておけばよかつたって思っ、てもそれが本当に良いことなのかだっ、て私には分かるわけがないからいつまでもああすればよかつたこうすればよかつたなんてぐるぐる考えてしまっ、て、それが嫌だから忘れよう忘れようと二回呟いたぐらいで本当に忘れそうになるぐらいに私の頭はトリアタマなんだってこともあなたは知らないんだろうなっ、てそんなことを思うだけで本当に泣きそうになるしあなたの髪だっ、て飛んでるうちに無くしそうになっ、たっ、ていうか空に飛ばしてしまいたくなっ、たぐらいなんですよっ、て言っ、たらあなたは怒るでしょうか泣くでしょうか悲しむでしょうか、いや、きつとあなたは笑いながら言うんだ『それでいいんだっ、て』あ

のファンが出来て、それがよくよく考えてみたらあなたの生まれ変わりだったなんて運命の出会いっていうか久々にあなたのこと思い出して切なくなっただけど新しく友達としてやり直せたらきつときつと楽しくて楽しくてしょうがないんだって思つてアイスクリームとか夜のお散歩とかお泊りとかぬくぬく一緒のお布団とか楽しくて楽しくてしょうがなかったけど、やっぱり人間と妖怪だし何よりまだまだ子供だし私だつて昔のことを思い出して怒つて焦つてしまつて上手くは出来なくてちよつと悔しくて腹立てたりもしたし悲しくもなつたけど、今度の阿求は私がちよつといじけてる間にあんな凄いの書いててそれを読んでたらこんな風にいじけてる場合じゃなくてあなたのこと忘れてる場合でもなくつてちゃんと私にしかできないこと、私にしか書けないことを書かなくちゃつて思つて、あなたのことちゃんと思い出して供養してあげなくちゃつてようやく思えたりはしたんだけど、やっぱり頭空っぽにして遊んでた罰なのかもしれない、何からどう書いたら自分の中の始末が付けられるのが全然分からなくて本当はそうじゃないはずなのに哀しい思い出ばかり浮かんで出てくるのは呪いの言葉ばかりかしでちやんとした本当の気持ちなんかちよつとも書けなくて途方にくれるばかり、つていうかこのしゃべつてる言葉だつて全部全部あなたのための言葉のほすなのに褒め言葉つていうかのろけつていうか愚痴つていうか恨み節つていうか、良く分かんないことになつてるけどつ

息を、吸う。

叫ぶ。

「とにかくとにかくくださいすきでした！」

こだまする声。

そして余韻すら消える。

ぼたりと何か落ちる気配がした。

文の顔は、涙で濡れてぐしゃぐしゃになっていた。

伸びきっていた髪の毛がしゆるしゆると縮む。部屋の奥で一つの丸い大きな毛玉になって動かなくなる。部屋全体を包んでいた深い闇は消えて、ただの岩肌がむき出しになった湿っぽい洞窟だけが残されている。

燃えていた紙もぱたと人々に叩かれて消される。人々の手に持っているカンテラの明かりだけが残って、ほんのりと暖かな光に照らされていた。

私たちは顔を見合せて、ふうとため息をついた。そうして互いに力なく笑いあった。へなへなとしゃがみこんで互いの肩を抱いた。

文のすぐ隣で視線を投げかけている母様に気づく。二人の視線が交錯するのをひどく居心地悪く感じた。

「……さあ、帰りなさい、阿求。あなたの家は向こうだ」

文は無愛想な声をして、私の背中をそつと押す。

私はただ押されるがままに母様の腕の中へ飛び込む。母様は一度だけ私をぎゅつと抱きしめた。その手はどんな言葉より優しかった。

「天狗はどうでしたか。何か縁起に書けそうな弱点など掴めましたか？」

その声は少しだけ浮かれていた。厭味のつもりかとひやりとしたが、文が意に介する様子はない。それよりは虚脱したようにして、ぺつたりと地面に座り込んでいることのほうが気がかりだった。

「母様、天狗は最強です。ペンは剣より強いですから」

そうして母様の腕から離れる。背を向ける。向かい合わせの文の目がひどくうつろなのを見て、胸の奥がぎゅつと切なくなる。

「でも、もう少し一緒にいたら分かるかもしれません。母様、しばらく文のところに泊まらせてください」

そう口にしたことの後悔は無かった。

その晩はにとりと文と三人でにとりのワゴンに泊まることにした。けっこうキツキツだったけど床に毛布を敷いてぎゅうぎゅう詰めになつて寝るのは今までにないことで楽しかった。

「えへへ、文のそばで寝るの好き」

甘えて文の腕の中に飛び込む。

どことなく浮かぬ顔をしているのを見かねてのことだ。それぐらいの気遣いが出来るようになった自分を少し褒めてあげたい。

「はいはい灯り消すからねー、となりでえらいことするの禁止だからねー」

茶化すようににとりが言う。

「しないですー、ちよつといちやいちやするだけですーっ」

「まったく阿求は浮かれてますね」

ようやく文が苦笑してくれて、私は少し恥ずかしくなった。こんなに子供みたいに振る舞うつもりは無かったのに。

ランタンの灯が消える。完全な闇に染まる。

隣に寝ている文へ頬をすり寄せて、ぎゅつと文の頭を抱きしめてあげる。胸がないからあんまり据わりが良くないけれど、できるだけ文が前にしてくれたような感じで卵を温めるような感じで抱いてあげる。

「文のこと、好きだよ」

つぶやくと、かすかに文がうなずくのが分かった。少しだけ震えているような気がして、そ

つと頭を撫でてあげた。

「今度みんなでどっか行こう。美味しい紅茶屋さんがあるの。人里で一番人気でね、いつか行つてみたいんだ」

取り留めもない約束をして、まだまだ終わらないんだってそんな風に言つて。

「あとね、アイスももう一度食べたい。次はチョコ味がいいなあ。イチゴもいいけど」

夏の思い出をもつと増やしたくて。書きたいと思うようなことをもつと増やしたくて。「三連にしてみたり、カップじゃなくてコーンに入れてみたりさ、いっぱい楽しいと思うの」笑いたくて、楽しみたくて。一緒にいることを感じたくて。

「うん、そうですね」

ほとんど消えそうな声で、文が答えた。

「一緒に行きましょう。どこでもいいけど、どこか、楽しいところに」

ごしごしと何か擦るような気配。それから小さく鼻をかむ気配。私は何も言わなかった。ただそつと小指を伸ばす。

「指切り、ね」

「ええ。絶対」

指と指をきゅつと結んで。揺らして。切るのをちよつと惜しいとも思つて。

「はいはいバカップルバカップル」

眠つたと思つていたにとりが冷やかすように呟いたのを契機にして、そのまま眠りに落ちることにした。

うとうとしてゐるうちに夢を見た。

一人で泣いている子がいたから、みんなで慰めてあげてる夢だった。

見覚えのない子供だった。長い振り袖が地面に着くほどの子供で多分私よりもずっと幼い。

長い前髪のせいでもほとんど表情が見えなかった。

にとりは周りにあつた適当な材料を使つてびっくり箱を作つてあげた。その子は大きな声で叫んで、それからますます泣いてしまった。

文は全力を込めて面白い顔をしてあげていた。私もにとりも大笑いしてしまつたのに、その子は低木の茂みの奥に隠れてしまった。

私は、どうしよう、と悩んで、考えて。

それから、お話をしてあげることにした。

——むかし、むかし……いや、えつと、そんなに昔じゃないんだけどね。あ、主人公の名前を決めようと思うんだけど、たとえばあなたの名前は？

その子は何も答えてくれなかった。それでも負けずに話し始めた。

——えっと、おじいさんと、おばあさんと、それから犬がいてね……。

——おむすびが落ちて、えっと、池に落ちて、蟹と喧嘩して、それから……。

——親指ぐらいのお姫様は、それで灰かぶりつて名前になって、ガラスの靴を探しに行くんだけど、鬼ヶ島でようやく手に入れた靴が王子様の前で割れちゃって……。

とにかく考えて考えて、次から次へ、乏しい物語の破片をつなぎ合わせ続けた。これまでに聞いたことのある物語。今とつさに思いついただけの物語。頑張つて、飽きさせないように、聞いてくれるように。

でもやがて、それも尽きて口ごもる。

汗がだらだら流れるのに口が渴いて、どうしようどうしようって言葉が頭の中をぐるぐる回つて、無音が怖くて、手の平を何度も握つたり閉じたりする。

それでもあまりにも思い浮かばなくて、ごめんね、続きはもうないやつて言いかけたその瞬間に、その子が初めて口を開いてくれた。

——それで、どうなったの？

そこで目が覚めた。なんだか寝付けなくなつてしまつて、外の空気を吸いに行こうと思つた。

洞窟の外は、月が明るかった。もう秋風が吹いている。へくしょんと小さくくしやみをした。夢の中で会った、小さな女の子がそこにいた。地面に着くぐらいの長い振り袖も目が全然見えないうぐらいの長い黒髪もそのままだ。

「誰？」

尋ねると、もぐもぐと口を動かして、それでも結局何も言わずにしゃがみこんでしまった。

「ど、どうしたの……？」

私も一緒にしゃがむ。女の子はちよつとだけ顔を上げてまた口をもぐもぐさせる。耳をそばにやって、目をつぶって聴覚に集中すると、本当に小さな声が聞こえた。

——意地悪してごめんね。

——書いてくれて、ありがとう。

——くやしかったけど、嬉しかった。

——縁起、頑張つて。

びつくりして彼女を見ようとする。

ふあさ、と髪の毛だけが地に落ちて、そしてすぐに空気に溶けたように消えてしまった。

今のが、アヤだったんだな、とぼんやりと思った。

月明かりの下で、私はひっそりと書き始める。

自分だけの、幻想郷縁起。

今日のこの文章のうち、どれだけの箇所が採用になるか分からないけれど、一文も書かないうちから諦めるのはいけない。

なにより今日のことをどうにか形にして残しておきたかった。

今日感じている、出来る限り全てのことを。

これから書こうと思っている書物全体のことを念頭に置いて、序文と独白を書き始める。

『幻想郷縁起はこの本で九冊目となる。過去の幻想郷縁起より、新しい風を吹き込みつつ、出来るだけ今風にデザインし直し、遙かに読みやすい内容となっていると思っている』

勇気を出して、デザイン、などと横文字を使ってみた。分かってくれるだろうか。古くさい年寄りには眉をひそめるかもしれないが、これは私が死んだ後もずっと読まれるのだ。それならば私と同じような子供達のために書かなければならない。先進的な人々ならきつと分かってくれる。

『今まで転生を行うたびに、人間関係がリセットされるのが一番辛いことだった』

死ねばそれは別れた。疑いようもない。

でも、今度、みんなと紅茶というものを飲みに行く約束をした。きつと好きになれる、そん

な気がする。

きつと百年後も私たちは紅茶を飲みに行くのだ。

きつと二百年後も、三百年後も、紅茶を飲んで、アイスを食べ、夜空を見上げて、おしゃべりをして、一緒のお布団で眠って、そうして、幸せな夢を見るんだ。

『私が百年以上地獄に落とされていようとも、人間は全て入れ替わってるだろうが、妖怪は同じ顔ぶれに会うことが出来るだろう』

オリジナル版：2009年10月11日第五回東方紅楼夢

個人誌「メモランダム」収録

電書版第一版：2011年5月14日（二段組）

電書版第二版：2013年12月30日（一段組）

（改版にあたり一部表現を改めました）